

# 明治期毛利家編輯所における「談話速記録」の作成

―毛利敬親を語る「井上定亮翁談話」と「岡義右衛門翁談話」の紹介―

山崎 一郎

## はじめに

毛利家文庫「76速記録」には、明治二十～三十年代、毛利家編輯所（修史事業を担当する毛利家内の部署）が幕末維新时期体験者へ聞き取りを行い作成した「談話速記録」が四八件・五九冊残る（表1）。談話者は楳取素彦（貴族院議員・男爵）、穴戸璣（編輯所所長・子爵）、木梨精一郎（男爵）、吉富簡一（初代山口県議會議長）をはじめ、元長州藩士・元諸隊士など多様な人物のべ三六名に及ぶ。幕末期に長州藩政務座役人として活躍し、明治期には毛利家編輯所員となった兼重慎一<sup>(2)</sup>のように一一冊を残す者もいる。「談話速記録」のうち一三冊は、明治四十四年～大正三年（一九一〇～一四）に『防長史談会雑誌』で活字化されている。<sup>(3)</sup>

明治期毛利家編輯所における「談話速記録」の作成（山崎）

本稿では、未翻刻の「井上定亮翁談話」（速記録41）と

「岡義右衛門翁談話」（同47）を紹介したい。談話者井上定亮と岡義右衛門は、幕末期の長州藩主毛利敬親の小姓（近習）を務めた経験があり、敬親について多くを語っている。敬親死後四半世紀を過ぎた時点での語りだが、敬親の人となりを知る貴重な証言である。

あわせて、「談話速記録」が作成された明治二十～三十年代における毛利家の修史事業について概略を述べたい。

## 一 明治二十～三十年代における毛利家の修史事業

宮内省の特命事業 明治二十一年（一八八八）七月、宮内省は、毛利家および島津家・山内家・水戸徳川家の四家（特命四家）に対し「国事軼掌事蹟取調」を命じた。

各家が嘉永六年（明治四年（一八五三）七二）に「王政維新」にいかに関与したのか、その事蹟をまとめた編集物の提出を命じたものである。明治二十（三十年代、毛利家編輯所はこの特命事業に大きな力を注ぐ。<sup>(4)</sup>

中原邦平 特命を機に、毛利家は東京の編輯所体制を強化し所員を増員する。二十二年一月、明治（大正期）の編輯所で中心的役割を果たす中原邦平が補助員として採用された。中原は嘉永五年（一八五二）大島郡久賀の生まれで、日野宗春、加藤有隣に漢学を、東沢瀉に陽明学を学ぶ。明治四年上京、宣教師ニコライにロシア語を学ぶ。

十四年に陸軍省御用掛となり翻訳課・編纂課に勤務、十八年に依願退職、のち毛利家に雇い入れられた。二十三年八月に二等編輯員、二十六年十二月に一等編輯員となる（四二才）。<sup>(8)</sup>当時、一等編輯員には兼重慎一、中村弼、竹中兼和らがいすがいずれも高齢のベテランで、実質、編輯所実務は中原を中心に進められていく。

特命事業の進捗状況 特命事業は三年の期限付きであったが、進捗の遅れから特命四家は延期を願い出、二十四年六月に三年の延長が認められた。その後も二十七年六月、三十年六月、三十三年七月と三年の延長が続いたが、

三十三年、宮内省は三十六年には「草稿ノ俣」でも提出せよと最後通告を出す。<sup>(9)</sup>

この間毛利家では、二十九年十二月二十三日に当主元徳が逝去、若い元昭が当主となる。これを機に、井上馨（毛利家の家政協議人筆頭）を中心に特命事業の遅れを解消すべく編輯所の改編が図られた。所長矢戸璣が辞表を提出し（三十年四月二十六日）、伊藤博文の娘婿末松謙澄が新所長に迎えられた（五月二十七日）。また、原稿執筆者として、堺利彦、笹川種郎、斎藤清太郎、黒田甲子郎、山路弥吉ら新聞記者、学校教員など筆の立つスタッフが新たに雇い入れられた。中原のほか、編輯員福井清介、市川寅介、佐伯令亮らも残り、大田報助が系譜掛、時山弥八が文庫係となる。<sup>(10)</sup>

新体制下での原稿作成期限は二年とされ、三十二年六月には各執筆者が原稿提出を終えた。<sup>(11)</sup>この原稿にさらに末松が手を入れ、三十三年から『未定稿防長回天史』として印刷が開始された。ただし、この時全編が一挙刊行されたわけではない。三十四年までに第一（三編、三十五年二月に四編、九月に五編の一部が刊行された）に止まる。三十三年四月、山口での忠正公銅像除幕式にあわせ

参列者に『回天史』が配布された。配付されたのは『回天史』三編のみであったと考えられる。<sup>(12)</sup>

**特命事業の終結** 末松の下で一部が刊行までたどりついた『回天史』であったが、最終的に『回天史』が特命事業の成果物として宮内省へ提出されることはなかった。多忙な末松の下では『回天史』全編完結が見通せず、三十六年に他の三家と一緒に提出できないと毛利家が判断した点が大きかったと考える。<sup>(13)</sup>

三十六年十一月、特命四家は宮内省へようやく編纂物を提出し事業に終止符を打った。この時毛利家が提出したのは「官武間周旋始末」(「官武間周旋記」)二七冊であった。<sup>(14)</sup> 編纂は中原が担当した。中原は三十四年十月から作業に入っており、毛利家はこの時点で中原編纂の「官武間周旋始末」を提出物とすると内々決めたのではなからうか。<sup>(15)</sup> 十一月朔日、中原、福井清介、時山弥八らに「記録調査並びに忠正公御一代史料取調べ」が命じられた。

これは「忠正公父子編年史」編纂の開始を指すとされるが、<sup>(16)</sup> ここには「官武間周旋始末」編纂作業も含まれたであらう。

特命事業終了後、編輯所では中原を中心に「忠正公父

子編年史」編纂が進む。一方『回天史』も末松を中心に編纂が続けられた。中原や時山がこれをサポートした。<sup>(17)</sup> しかし、四十四年六月三十日、末松は「事業委嘱」を「解除」され所長の任を解かれた。『回天史』は毛利家からではなく、最終的には末松個人の出版という形となる。<sup>(18)</sup>

## 二 「談話速記録」の作成

「談話速記録」作成は十数年続いたが、その作成事情には、二十七八二十九年頃(Ⅰ期)、三十十三十一一年頃(Ⅱ期)、三十五三十九年頃(Ⅲ期)でやや違いがある。

Ⅰ期は、特命事業を進める宍戸磯所長時代後半期にあたる。確認できる限り二十七年四月作成のものももっとも早く、このころ作業が開始されたと考えられる。Ⅰ期は一四名に聞き取りし、二四冊が作成されたが、兼重慎一の談話が一一冊と多い点が特徴である。

前述のように特命四家はたびたび宮内省へ延期願を提出したが、毛利家が二十四年五月に提出した願書では延期が必要な理由として、

当時ノ事蹟記録而已ニ依リ候テハ往々証拠確ナリ難キモノ有之、実歴ノ人ニ就キ質問討議ヲ尽シ、又

諸家関涉ノ事件ハ其各家ニ依リ彼是事実ヲ確定シ、然ル後加除訂正ヲ要スル事不少候

とある。<sup>(19)</sup>幕末当時の文書記録のみでは確証が得られない点も多く、経験者（「実歴ノ人」）から聞き取りを行い、その上で「事実ヲ確定」する必要があるという。

別稿で検討したように、毛利家は政府からの要請を受け、明治十年代までに敬親の伝記を編纂する機会をたびたび得た。また、敬親の勅撰銅碑建設に伴う碑文選定作業、あるいは政府の各種問い合わせに対応するため、十六年二月、所蔵する大量の文書記録（家文書、藩政文書等）を山口から東京に移転させた（毛利家文庫<sup>(20)</sup>）。このような状況下、編輯所員たちは所蔵文書記録の概要、内容はかなり把握できていたと考えられる。しかしその上でなお、特命事業にあたり、「事実ヲ確定」<sup>(21)</sup>するためには実歴者への聞き取りも必要と認識していた。

二十二年四月、各家史料の情報交換や懇親を目的として、特命四家および岩倉・三条家の編輯員を中心に史談会が結成される。他の大名家も参加し拡大していった史談会では、維新时期に活躍した人から実歴談を聴く場を設け、その成果を『史談会速記録』として刊行した。二十

五、三十一年、山口県関係者では一五本の談話が掲載されているが、うち七本は兼重慎一の談話である。中原邦平は史談会幹事として、のちには兼重の代わりに史談会委員代理も務めるが、史談会の活動を通じ、実歴談を聞く必要性を改めて認識した側面もあったろう。

「談話速記録」および史談会で談話を多く残した兼重慎一は、三十年二月一日に八一才で亡くなる。彼の「談話速記録」が作成された二十七、二十九年は、彼の最晩年にあたる。重鎮として長く編輯所に勤めた兼重は、すでに高齢で実務を担うことは難しかったであろうが、それゆえ自分の見聞きしたこと、知識を語り残しておきたい気持ちが強かったと思われる。

中原も、幕末期の生き証人とも言うべき大先輩兼重から出来るだけ話を聞いておきたい考えであったろう。三十一年、中原が河北一（毛利家家扶）に聞き取りを行った際、河北に対し、

貴君にも度々御話を承りましたが、兼重翁も死なれまするし、私が記憶して居る位のことです。ですから、御話を速記して置けば消へずに遺らうかと思ひますし、編輯所員諸君の参考にも余程ならうと思ひ

ますから御話を願ひに出しました。

と述べている（「河北一翁談話速記」）。幕末期経験者へ聞き取りを行い、それを文字化し残しておくことの必要性を中原が強く意識していたことがわかる。

Ⅱ期（三十〜三十一年頃）は、特命事業の進捗を図るため編輯所体制が改変された直後にあたる。この時期については、従来、「社会新報」の記事を元に、中原と末松および原稿執筆者たちの間の対立、あつれきが強調されてきた。しかし、編輯所の日記や執筆者のひとり堺利彦の回想をみると、「社会新報」の記事とはかなり隔たりがある。<sup>(22)</sup>「堺利彦伝」は、当時の「回天史」編纂作業につき次のようにいう（傍点・傍注は山崎）。

（末松謙造）

・かくて青萍先生以下「他藩人」が編集の主体となり、中原翁以下旧臣連が顧問となり、案内者となり、説明者となり、それで編集を進めて行くのであった。  
・最初は旧臣連中の監視なり、しつとなり、こじゅうとらしいささを見せるのでないかと、少しは気づかわれもしたが、しばらくたつてみると、そんなことは跡形もなかった。  
・旧臣連はいずれも浮世ばなれた人たちで、この

別天地に悠遊して、ただその日を暮らせばよいのであった。

（佐伯令亮）

・こうした空気の中に包まれて、中原翁、佐伯翁、〇〇翁などと同じく、三四歳の愛山翁もでき、二八歳の臨風翁、<sup>（笹川龍郎）</sup>枯川翁もできたりして、すべてが和気あいあいの形であつた。

（山原邦平）

・青萍先生のごときは、翁の眼中において全く一個の坊ちゃんだった。愛山、臨風以下の徒に対しては、その博識をもつて諄々と語り、その飄逸をもつて淡々と交わるのであつた。要するに毛利家編集所は、ただこの大長老のあるがために、従来せめて一道の生氣を保ちえたのであつた。

「社会新報」がことさら書きたてる、所内での対立や緊張関係はみじんも感じられない。中原は自らの知識を少しもなく披瀝し、「諄々」（ていねいに繰り返して）教えいましめるさまと、「飄逸をもつて」（人事や世間の事を気にしないでのんきなさまで）、「淡々」とアドバイスする体であつた『広辞苑』。おそらく、「毛利家の依頼でお仕事をされるみなさんへお手伝いもアドバイスもします」が、幕末長州の正史を書くのはそう簡単ではないですよ」

という姿勢ではなかったろうか。

その中原は、速記者として新たに雇い入れられた伊内太郎とともに、三十一年三月から調査のため山口県へ出向き、帰路敦賀に立ち寄り、五月に東京へ帰るといふ調査旅行に出ている。速記者伊内を伴っていることから「談話速記録」作成が目的であったことは明確である。「編輯掛日記」には「山口河北一其外へ訪問ノ報告書共、男爵江送致ス」との記載もみえ、中原が末松（男爵）へ調査旅行の報告書を提出したことも確認できる。

Ⅱ期の「談話速記録」は、特命事業の進捗を図るため、末松および新たな原稿執筆者たちに、「談話速記録」という幕末維新期をイメージしやすい新たな資料を提供する意図で作成が進められたと考える。作業の中心はやはり中原であった。

Ⅲ期とした三十五〜三十九年は、「官武間周旋始末」の編纂、宮内省への提出、その後の時期ということになる。

「回天史」は三十六年の特命事業終了以後も末松により編纂が続けられ、時山や中原もそれを手伝っている。一方中原は、編輯所で「忠正公父子一代編年史」編纂を進めるとともに、三十五年正月からは井上馨の伝記編纂も

担当する（『井上馨伝』四十年五月刊行）<sup>(23)</sup>。Ⅲ期の作成と考えられる「デ・ビー・グラバ史談速記」（速記録29）で中原は、談話者グラバーに次のように説明している。

今日の質問はミストラルグラバの履歴を調査する為めではありませんぬ。旧長州藩（即ち毛利公）の歴史編輯の材料并ニ伊藤・井上二公の事蹟調査の参考とするのであります。

「談話速記録」は、毛利家編輯所の修史事業のためのみならず、井上馨・伊藤博文の事蹟調査のために行なう。この時期の「談話速記録」作成が、『井上馨伝』編纂のための調査を兼ねていたことが知られる。<sup>(24)</sup>

この時期の「談話速記録」は、「回天史」編纂上からも作成されている。日露戦争前の三十七年二月、末松は欧州でのロビー活動の使命を帯びて渡英することとなり、<sup>(25)</sup>編輯所の後事は中原・時山に任せた。その年六月、土屋平四郎（土屋蕭海末弟）が編集所を訪れ、既刊の「回天史」の中に、兄矢之助（蕭海）に関する記述に間違いがあると申し入れた。これを受けて七月十八日、中原・時山・伊内が平四郎から聞き取り調査を行っている（記録整理掛日記）。

一 土屋平四郎来所、土屋矢之介の件、回天史中に相違の点ある由申すに付、回天史三編以下五編ノ四迄を渡す（六月二十日条）

一 午后二時頃より土屋平四郎（故土屋矢之助実弟）を招き、壬戌丸其他土屋矢之助に関することを聞く、一席せしもの中原邦・時山弥八、又伊内太郎を雇ひ其談話を速記せしむ（七月十八日条）

この時の成果物が「土屋平四郎君談話速記」（速記録 46）である。「回天史」編纂上も「談話速記録」作成が有用であったこと、また「回天史」編纂作業に中原らの役割が小さくなかったことがわかる。

以上のように「談話速記録」作成は、各期特有の必要性をもつて進められた。その前提には、編輯所での修史作業において、文書記録のみならず経験者への聞き取りも重視する手法が採られたこと、および幕末維新期の証言を記録化する必要性を強く感じていたことが大きい。幕末維新期を語る経験者の声は、まだぎりぎり手の届くところにあつた。作業の中心は中原邦平であつた。

### 三 「井上定亮翁談話」と「岡義右衛門翁談話」

本稿で翻刻・紹介する「井上定亮翁談話」と「岡義右衛門翁談話」の概要について述べたい。

\* 翻刻にあたり、便宜上、各「問」「答」に通し番号を付けた。原本にある（ ）書きと文字のルビはそのままを示した。ただし、傍注の（ ）書きは山崎が付けたもの。

#### （一）井上定亮翁談話

井上定亮 談話者井上定亮（四郎・兵部）は、文久三年（一八六三）二三才で敬親の小姓となり、敬親が死去する明治四年三月二十八日までの十一年間、小姓（のち近習）を務めた。『もりのしげり』は「御小姓」につき、禄高三五〇石以下の大組士およびその嫡子が就いた役とし、次のように説明する。

藩主に昵近する役にして、初て御櫛役となり順次に下記の役に昇る。御櫛役、御添肩衣役、御判紙役、御小納戸役、配膳役、是なり。此等の外に平小姓あり。慶応元年正月一時御前詰と改称し、五月頃平小姓に復す。明治元年九月二十六日小姓の名を廃し近習と改む。

談話収録の時期 作成年の記載はない。ただし、①速記者伊内太郎が三十年五月頃毛利家に雇い入れられている



こと、②定亮の答54に「今の野村大臣が」との発言があり、これが二十九年九月～三十一年一月に第二次松方内閣で通信大臣を務めた野村靖を指すと考えられることなどから判断して、談話はⅡ期、三十～三十一年頃のものと考ええる。とすれば、定亮五七、八才頃、敬親死去から四半世紀を経た時点での談話ということになる。

**敬親の日常・人柄** 質問者中原は、記録には残りにくい敬親の人柄、日々の暮らしぶりを聞き出したい意図があったと思われる。たとえば食事については答7・27・28・35がある。日常的には一汁二菜だが、定日に刺身や御平（平椀）、蕎麦などが付いたこと、好き嫌いは特にないの、沢庵など消化の悪いものは避けていたという。衣服については答8・17・52、朝晩のようすは答23・24・25がある。

ものの考え方、信条に関しては、敬親が中国の宦官の弊害を強く認識し、側近には政治向きのことを話さない姿勢であったという（答14・22）。また、俗説として語られることもある、関ヶ原の戦いの恨みをはらすといった考えは敬親にはなく、あくまで朝廷へは忠節、幕府へは信義という立場であったとの証言もある（答21・22）。

人柄については、たとえば、食事は茶碗三膳と決め、体調にかかわらずそれを守ることで家臣に心配をさせないようにしていたとか（答28<sup>26</sup>）。敬親が山口市巾を歩いた際、御付きの家臣が農作業中の百姓に頼かむりを取らせようとしたところ、敬親が制し、百姓の仕事を邪魔しないよう命じたという逸話（答29）が紹介され、家臣や領民に気を遣う殿様であった姿が語られる。

家臣を強く叱りつけたり、怒ったりすることはなかったが、幕末期、狭い山口の御茶屋内で（敬親が注意したにも関わらず）家臣が酒を飲み騒いだことに対し珍しく怒りを露わにした（「酷う大叱責」）話が紹介されている（答33・34）。一方、明治初年、儀式の場で身分不相応の衣服を身に着けた三宮の大夫につき、それを強く咎めることなく、家臣にそれとなく注意を促したというエピソードもある（答18）。

自身は酒をほとんど飲まないが、家臣たちに酒を勧めるのは好きであった（答20）。これといった趣味はなかったものの、薄茶を好み（答9）、書をよく読んだという。

元治の内戦時や明治初年脱騒動時における敬親の動向については、答42・43・46～49等で触れられている。



逝去直前のようす 談話中特に注目されるのが、敬親が亡くなる数日間が詳しく語られていることである（答10・12、19・20）。管見の限り、死の直前をこれだけ詳しく語ったものは他に見当たらない。敬親は明治四年三月二十八日に逝去する（五三才）。定亮の証言によれば亡くなる数日間は次のようになる。

敬親の体調が悪くなったのは三月二十日暁方のことで、眩暈のする状態になったという。その後持ち直し、敬親も「乃公<sup>おれ</sup>は今は格別はない」と周囲を安心させた。

定亮を近くに呼び瓢箪の酒を飲ませ、酒は飲んでも飲まれるようなことはするなよと笑ったという（ただしこれは別の日の逸話かもしれない）。二十一日から二十三日にかけては平静を保ったものの、二十四日夕飯後、夜八時頃からふたたび具合が悪くなり、御側医は「ドウも御脳を酷う衝たやうな」と診断をする。二十五日朝九時頃から頭を冷やす手当を始め、二十六日朝、顔は赤いものの、まだ寝床で座ることのできる状態であったが、午後四時頃から具合が悪くなり、御側医たちもどうもよくないと判断する。暮方、寝床に横になるが、その際、「天余命を十年仮さば朝廷に対し大に尽す所があるが逆も痊くはな

らぬ」と述べたという。答10ではその発言は、「乃公<sup>おれ</sup>は逆も往けぬゼヨ、天余命を乃公に十年仮せば朝廷の為に尽す所があるが残念だ」とある。微妙な違いはあるものの、発言はおおむねこのような趣旨で、これが敬親最後の言葉になったという。なお、答20ではこの発言は二十六日と読めるが、答10では二十七日のこととある。敬親の死因は「脳充血の軽く来たもの」とある（答12）。

高杉晋作 談話中、高杉晋作に触れた箇所が3か所ある。敬親には関ヶ原の恨みをはらすという考えはなかったという話に関連して、答22では、高杉が敬親の前で、「今は好い機会であるから此際にどうかなされエとか、関ヶ原の恨を御報じなされエとか御前で言ふたと云ふことでございます」とある。また、答56・57には高杉の風貌、日ごろの言動について言及している。

#### （二）岡義右衛門翁談話

岡義右衛門 岡義右衛門は、「私は君側には二十年余も居りました」と述べているが（答19）、井上定亮のように小姓一筋ではなく多彩な経歴をもつ。

談話および『防長回天史』、石川敦彦編『萩藩職役人名辞典』などを参考にとすると、①安政二年（一八五五）八

十二月、「軍艦製造方伝習御内用」との藩命を受け、山田宇右衛門、藤井百合助、大工棟梁小沢忠右衛門らとともに、反射炉や軍艦建造技術伝習のため佐賀藩や長崎、薩摩藩に派遣される、②文久二年（一八六二）末から翌年（一八六三）にかけて壬戌丸に仕官として乗船する、③元治元年（一八六四）二月と十月に直目付を務め、七月には津和野・浜田藩へ使者として派遣される、④慶応元年（一八六五）二月と閏五月、直目付再役、⑤慶応元年九月と同二年八月先大津代官、⑥慶応二年八月と同三年四月山代都合役、⑦慶応三年六月に岡山藩、七月に土佐藩へ使者として派遣される、⑧明治元年八月、津和野藩へ使者として派遣される、といった経歴をもつ。

小姓を務めた時期は、佐賀・薩摩へ派遣される安政二年以前、および帰国以後から壬戌丸乗船以前と考えられる（答14）。以後は、元治元年二月と十月、内訌戦期を挟んで慶応元年二月と閏五月に直目付として敬親を支え、使者として各藩に派遣された慶応三年六月と明治元年八月にも敬親の近くにあったということになる。

談話収録の時期 作成年に関する記載はなく、時期を知る直接的な手がかりもない。質問者中原、速記者伊内太

郎のコンビなのでⅡ期もしくはⅢ期作成である。

敬親の日常・人柄 敬親の日常、中でも食事に関しては、答20と24に証言がある。特に好き嫌いはなく、たとえばあまり気に入らない御菜でも一応箸をつけた形としたとか、好みの料理があつてもまた捨てよとは言わなかったなど、家臣に気を遣う殿様であつたことがここでも語られる。

自身は酒をほとんど飲まないものの、人に勧めるのは好きだったという話、御茶好きであつた話を岡も紹介している（答33）。煙草は吸つたという（答38）。衣服に関しては答19・20で触れられる。また、鉄砲猟が好きで萩で鴨を撃つたという（答33）。小姓を強く叱責することもなかったという（答25）。

岡は、中原の「（忠正公の）平生の御行状は」という問いに、「大抵は知て居りますが、格別目立つ事はなかったの」と答えたり、「忠正公の平生の御行常には、どうも目立つようなことはございませぬナ」という問いかけにも、「そうです」と答えている。岡には敬親がそのように見えていたのか、あるいは余計なことと言われないつもりであつたのかはわからない。

待御史（直目付）と敬親 談話中で注目したいのは、幕

末期の「待御史」(直目付)の役割を語る点である(答25〜30)。「政府」(当職、当役、加判役)から藩主敬親に伺い出たことに對し、敬親はすぐには判断せず、「翌日まで案じて置く」といったん引き取り、そののち御座の間に「待御史」(直目付)を召して會議をし、彼らの意見を聞いた上で翌日「政府」の者に判断を告げたという。

敬親と言え、家臣の伺いに何でも「そうせい」と言つたと語られることもあるが(史料の根拠は不明)、岡が語るのは、安易に即断はせず、直目付との會議で意見を聴いた上で物事を判断する慎重な敬親の姿である。また岡の証言からは、幕末期、直目付の役割の大きさも知ることが出来る。本稿で底本にした清書本と一緒に綴じられている草稿本では、岡は「待御史は今の枢密顧問<sup>(マ)</sup>みたやうなものでせうが」とも発言している<sup>(28)</sup>。

**元治元年七月末の三田尻での會議** 長州藩が内外からの危機に直面していた元治元年(一八六四)七月末、三田尻での會議のようすを語る答12も興味深い。

使者として津和野藩・浜田藩に派遣された岡は、元治元年七月二十一日帰国後、三田尻での會議に出席した。長州藩は同月十九日禁門の変で敗退、挙兵上京中であつ

た世子元徳は急遽多度津沖から引き返し帰国。敬親も山口を發し、三田尻で元徳、家臣らとともに今後の対応につき會議を開いた。前年の下関での攘夷決行をうけ、米英仏蘭四国連合艦隊の報復攻撃が迫る状況下でもあつた。

岡も参加したこの會議では、今後の藩の方針(禁門の変を上京した三家老以下の責任とし征長軍に対応すること)が決定されたが、岡の証言から、四国連合艦隊への対応についても激論<sup>(29)</sup>(「和戦の論」)があつたことが知られる。戦鬭回避のため和議を主張する麻田公輔(周布政之助)に對し、強硬に攘夷継続を主張した一人が加判役清水清太郎であつた。「どうも今日攘夷を止めては不可ん、日本は攘夷と云ふことに一体なつて居るのだから、君公が縦然外国の兵に負けて此所を脱走して御逃げなされても、助けて庇護して呉れもしやうが、攘夷を止めると云ふことでは日本人が容れぬから、何所までも攘夷を止めなくてはならぬ」と主張したという。

この會議に関し中原が、「諸隊の長官も御呼出になつたと云ふことがあつたやうですが」と問いかけたところ、岡はそれを否定し、藩の秘密會議であり、諸隊の山縣有朋や赤根武人らは出席していないと答えている。三〇年

以上が経過し、維新史に関し虚実入り乱れた話が流布する状況があつたことが知られる。

**小姓の役割** 『もりのしげり』の説明のように、藩主の側に仕える小姓には御櫛役、御添肩衣役、御判紙役、御小納戸役、配膳役などがあつた。岡の発言には各役職の仕事につき語る箇所がある（答2・3・35）。

**談話の末尾** 談話の末尾には、問答形式ではない岡の発言が一〇ほど掲載されている。岡のちよつとした発言を書き留めたものではないかと思われる（ここにも便宜的に1〜10の数字を付けた）。

### おわりに

紹介した「談話速記録」については、敬親死後ほぼ四半世紀を経た時点における旧家臣の談話であることからどこまで事実が語られているのか、記憶違いはないか、美化した部分もあるのでは、といった感想があるかもしれない。「談話速記録」原稿化にあたり、中原が談話内容を取捨選別した可能性も考え得る。豊富な内容をもつ「談話速記録」であるが、文書記録や他の証言ともすりあわせつつ、慎重に向き合う姿勢も重要であろう。

敬親のエピソード集には、中原邦平『忠正公勤王事蹟』（明治四十四年刊行）収録の「忠正公逸事」もある<sup>(30)</sup>。ここでは明らかに、「名君としての敬親」像が強くアピールされる。井上・岡の談話をベースに、話を脚色したと思われる部分もみえる。たとえば、次の記述は間違いなく井上の証言（答29）が元ネタである。

公郭外に歩行して、某村に到る時、農夫之を知らずして、巾を被りて耕作する者あり、従士公の通行を示して之を警す、公曰く、予の田野を遊歩するは、自己運動の爲にするのみ、然るに農夫をして巾を脱し跪拝せしめ、彼が産業を妨げるは忍びざる所なり、今より後必ず制する勿れと、爾来郭外の歩行には先払を廢し、僅に左右両三名を従うこの文章に続け、「公の爲す所此の如し、其民を愛し、農事を重んずるの心誠に深しと謂うべし」という。

「忠正公逸事」と比べると、井上・岡の談話は、月並みな表現だが、まだ「等身大の敬親」を感じさせる。岡談話から、「おれは」とか、「うぜよ」といった敬親の話しぐりがわかる点は興味深い<sup>(31)</sup>。二人の語りを通じて、共通する敬親の姿も垣間見える。

『防長史談会雑誌』で紹介された「談話速記録」もあるなか、豊富な内容をもつ井上・岡の談話がその選にも

れたのは、「等身大の敬親」が語られており、活字化されれば、「名君としての敬親」像に影響を及ぼす可能性がある。と中原が躊躇したゆえかもしれない。明治末、大正期に活字化されなかった事実から、ややうがった見方をすれば、両者の談話は、それだけ敬親の実像に迫る内容を含むものであったとも言えるのではなからうか。<sup>(32)</sup>

## 註

(1) 口述を書き取ったものと問答形式のものがあり、表題も「談話速記」「史談速記録」「談話」「口述」「口演」など様々だが、本稿では「談話速記録」と総称した。なお、館が所蔵する近代の速記資料に関しては第14回アーカイブズウィーク「情報と記録」解説シート「速記」口述を記録し、歴史に残す」(金谷匡人執筆) 参照(ウェブサイトで公開)。

(2) 譲蔵。明治十一年三月毛利家から「在県編輯掛り」を命じられ編輯所に入る。十六年に上京。編輯所では一等編輯員。

(3) 『防長史談会雑誌』は、明治四十二年六月、東京在住の山口県人で結成された防長史談会の機関誌。大正三年九月、三八号まで刊行。中原は四十三年六月以降、同会評議員。同誌は四十四年七・八月号が「幹事一同公私の用務多端」「本誌内容の改良上劃策する処多かりし為め」休刊。十月に再開し発行された二三号掲載の小幡高政「実歴談」が、「談話速記録」最初の

明治期毛利家編輯所における「談話速記録」の作成

(山崎)

活字化である。推測だが、編集(原稿確保)に苦勞する同会幹事へ中原が掲載を提案したのではないか。以後、どれを掲載するかは中原の判断に基づいたであろう。広田暢久「毛利家編纂事業史」(其の三)『山口県文書館研究紀要』(以下「紀要」と略記)第7号 一九八〇年、『防長史学』(復刻 マツノ書店 一九八三年)の「解説」(石川卓美著)等参照。

(4) 事業の全体像は、白石烈「宮内省の旧藩事蹟取調事業と史談会(上)(下)」『書陵部紀要』第七一・七二号 二〇二〇・二一年が詳細に検討している。島津家については寺尾美保「明治期島津家における家史編纂事業―大名華族による「国事執筆」始末取調」(松沢裕作編『史学会シンポジウム叢書 近代日本のヒストリオグラフィ』山川出版社 二〇一五)。

特命事業をめぐる毛利家の動向、それに伴う「回天史」編纂状況、そこでの中原邦平と末松謙澄の關係などに関しては、広田「毛利家編纂事業史(其の一・三)」『紀要』第3・6・7号、一九七四・七九・八〇年)のほか、田中彰「防長回天史と末松謙澄」(同氏『明治維新觀の研究』第七章二 北海道大学図書刊行会 一九八七年)、山口語司「明治の説得王・末松謙澄 言葉で日露戦争を勝利に導いた男」(集英社 二〇二一年)で言及されている。

(5) 大島郡久賀の医師山縣玄敬三男、のち藩医日野家養子。藩医青木周弼に蘭方医学を学び、のち大坂適塾に入門、さらに長崎で蘭方医学を学ぶ。帰国後、長州藩の医学館好生館舎長、山

口病院（藩の軍事病院）の総括を務めるなど、幕末維新期の医学、国事に尽力（『近世防長人名辞典』、日野巖『日野宗春』）。

（6）水戸藩士佐藤政祥の子、のち笠間藩士加藤惣藏養子。水戸の会沢正志斎・藤田東湖に学び、のち江戸昌平坂で兵学を学ぶ。長州藩士と親交があり文久三年山口へ来る。明倫館で教え、のち私塾を開く（『近世防長人名辞典』）。

（7）岩国藩士、陽明学者。岩国三士と呼ばれる幕末志士の一。『近世防長人名辞典』、『岩国市史通史編二 近世』（岩国市 二〇一四年）、『岩国幕末紀行』（岩国市観光振興課・文化財保護課 二〇一四年）。

（8）中原の経歴は、『近世防長人名辞典』、『維新史料編纂会委員中原邦平叙勲ノ件』の中原邦平「履歴書」（国立公文書館アジア歴史資料センター）、「編輯掛日誌」（19日記56）、「編集所日記抜粋」（19日記55）などを参考とした。

（9）この間の経緯は前掲註4白石論文（上）に詳しい。

（10）「編輯掛日記」（19日記56）三十年五・六月の条。なお、以後の特命事業の進め方、「回天史」編纂事業、そこでの末松謙澄と中原邦平の関係などに関しては、従来、明治三十四年「社会新報」連載記事、「防長回天史編纂事情」（9諸省

578）の記述が引用されることがあるが、この記事は、内容を十分吟味すべき性格のものと考えられる。当時堺利彦はこの記事を「彼らは我々の制作物および制作の方法を批判するのであろうか、あるいは実方穴戸子（旧所長穴戸璣）、悪方末松男（新所

長末松）として、一部空想の御家騒動を作るのであろうか」と批判した（『社会新報』の「防長回天史編纂事情」を読む『堺利彦全集』第一巻。傍点、（ ）書は山崎）。毛利家編輯所員も事実無根の「男爵攻撃」の記事として憤慨、困惑している（『編輯掛日記』三十四年八月八日条）。

（11）六月二十六日、当主元昭は、原稿提出を終えた執筆者および井上馨、末松らを招いて慰労の会を催し、執筆者に慰労金一〇〇〇円を下賜した（堺利彦「日記『全集』一卷316頁」）。

（12）この時期の「回天史」の刊行状況、山口での配布については「編輯掛日記」（19日記56）による。なお、当館蔵諸家文書（明治期の各地名望家の家文書）に『未定稿防長回天史』が残る例があるがいずれも三編である。

（13）末松は三十一年一月第三次伊藤内閣で通信大臣、三十三年九月伊藤主導の立憲政友会の創立委員、十月第四次伊藤内閣で内務大臣、三十四年は政友会の遊説で全国を駆け回る状況にあった（前掲山口「明治の説得王・末松謙澄」参照）。堺らの執筆原稿に末松が手を入れ最終稿とする手順では、クライマックスとなる「回天史」五・六編を含め最終期限三十六年までに完成させるのは困難と判断せざるを得なかったであろう。

（14）62官武周旋始末1「官武周旋始末」。

（15）「文庫日記」三十四年十月十九日条、三十六年六月三十日条（19日記57）。前掲寺尾論文によれば、宮内省へ提出された「官武周旋始末」は「旧藩史稿」と表記されている。



(16)「記録整理掛日記」(19日記58) 明治三十四年。広田「毛利家編纂事業史(其の二)」。

(17)三十九年二月末松は帰国し「回天史」編纂を再開する。

「記録整理掛日記」(19日記58)には、例えば同年だけでも、時山が「回天史」用に「四境戦図」を作成したり(九月十七日条)、末松が来所し中原・時山ともに「諸隊ノ件取調」を行なったり(十二月二十八日条)、時山や中原が末松邸に赴いたりなど、中原・時山が末松の「回天史」編纂に尽力したことを示す記事がみえる。本文でも紹介したが、中原は末松の留守中「回天史」編纂用に「談話速記録」も作成する。末松は『防長回天史』(明治四十四年刊)の惣緒言で、中原・時山のこれまでの協力に感謝を述べている。素直な気持ちではなからうか。

(18)この問題は、日露戦争後の維新史評価をめぐる社会的な動き、具体的には、史談会の急進化(殉国志士表彰問題)、島津・毛利・水戸徳川家らの史談会脱会と温和会結成(四十〜四十二年)、横浜での井伊直弼銅像建立問題(四十二年)、史談会の急進化と「自由主義的・国民主義的社会風潮」(宮地論文)に危機感をもつ井上馨による彰明会成立(四十三年)、そして

「藩閥の危機意識の産物」(大久保論文)とも称される維新史料編纂事業の開始(四十四年)などの動きに関連付けて理解したい。この社会状況下、公爵毛利家は末松による「回天史」編纂および出版の中止を決めるのではないか(大久保利謙「王政復古仕官と旧藩史観・藩閥史観」『大久保利謙歴史著作集7』

一九八八年)、宮地正人「政治と歴史学―明治期の維新史研究を手掛かりとして―」『現代歴史学入門』 東京大学出版会 一九八七年、箱石大「維新史料編纂会の成立過程」『栃木史学』第一五号二〇〇一年等参照。

なお、毛利家は退職する末松に「編纂御礼」一五〇〇円を特別に贈与している。同時期、長年仕えた家令兼常定誠への退職特別慰労金が二五〇〇円であり、末松への対応が格別悪いとは思えない(『用達所日記』(19日記65))。そのような文脈でみれば、四十四年刊行『回天史』惣緒言で末松が、本書の内容はすべて自分に責任があり、「毛利家ノ與リ知ル所ニアラサルナリ」と記したのは、毛利家への不満の意味ではなく、当時の社会状況下、私費での『回天史』の出版が公爵毛利家に累を及ぼさないための、末松なりの配慮と理解すべきと思う。

(19)前掲寺尾論文より引用。

(20)拙稿「明治前期における毛利家の修史事業と毛利敬親の伝記編纂」『紀要』第48号 二〇二一年。

(21)明治二十四年一月から帝国大学国史科の史学会で旧幕時代の聞き取り(のちの「旧事諮問会」)が始まった点も影響したかもしれない(大門正克『語る歴史、聞く歴史―オーラル・ヒストリーの現場から―』岩波新書 二〇一七年)。

(22)『堺利彦全集』第六卷(法律文化社 一九七〇年)「第六期毛利家編纂時代」146〜148頁。

(23)広田「毛利家編纂事業史(其の二)」。



(24) 中原が伊藤博文の事蹟調査を行うのは『井上馨伝』編纂の一環であろうか。中原には『伊藤公実録』（明治四十三年刊行 マツノ書店復刻 一九九七年）という著作もあるが、これは伊藤死後、伊藤に関する中原の講演をまとめたものである。

(25) 末松のロビー活動については山口前掲書に詳しい。

(26) 幕末の広島藩主浅野長勲も、食事は決まっております、担当家臣の手前、「それ以上も以下もまったく食えんのです」という『幕末武家の回想録』『大名の日常生活』角川文庫 二〇〇年。殿様の食事とはそういう面があるのだろう。

(27) この時の岡の動向は、道迫真吾「萩反射炉関連史料の調査報告（第一報）」『萩博物館調査研究報告』第5号 萩博物館 二〇〇九年）で紹介される史料に詳しい。

(28) 幕末期、直目付が政治的に重要な役割を果たしていたことは『山口県史 史料編 幕末維新4』（山口県 二〇一〇年）収録「柏村日記」解題（上田純子執筆）で指摘されている。

(29) 三宅紹宣『幕末維新の政治過程』（吉川弘文館 二〇二二年）第二章第一章「第一次長州出兵と長州藩」。

(30) 中原は「忠正公逸事」につき「山口御由緒会に於て編輯したる涙餘集の資料に拠り、之を訂正増補した」と説明する。

「涙餘集」とは、4 忠正公 91「涙餘録」のことと思われる。同巻末には「山口御由緒会員中」から矢戸磯ら二四名に対し、「忠正公御在世中御言行御高德之廉々、別冊之通、上山清也方ニ書取有之候処、尚遺漏之事柄モ可有之哉ニ候間」、御存知の

ところを教えて欲しいと依頼する文が掲載されている。あて先には高杉小忠太（二十四年一月死去）の名も見えるので、「涙餘録」は遅くとも二十年代前半には完成していたであろう（毛利家文庫本は三十六年時山校正のもの）。

(31) 速記が当時の話し言葉や話し方を知る史料としても重要となる点は註1「解説シート」が指摘している。

(32) 近年の毛利敬親をめぐる研究動向は、二〇一八年に山口県立美術館で『明治150年記念特別展 激動の幕末長州藩主毛利敬親』が開催されたほか、小山良昌「公爵毛利家と懐恩会・致誠会」『山口県地方史研究』九五（二〇〇六年）、同『萩ものがたり 名君毛利敬親』（二〇一七年）、同「松陰門下生・藩主毛利敬親（1）（2）」『至誠館大学吉田松陰研究所紀要』第2（3）号（二〇二〇～二一年）。敬親没後を扱ったものに、宮間純一「神道碑の下賜」『国葬の成立—明治国家と「功臣」の死』第七章 勉強出版（二〇一五年）、上符達紀「毛利敬親勲撰銅碑と毛利家—勲撰碑文撰文をめぐる—」『山口県地方史研究』第一一九号（二〇一八年）、網野ゆかり「失われた六基の『毛利家銅像』が物語るもの」『前同』第一一九号（二〇一八年）、浅川均「近代神社史料と向き合う—野田神社を創る—」『紀要』第四六号（二〇一九年）、拙稿「野田神社の絵馬と山代—明治一桁代の民政と杉民治—」『山口県地方史研究』第一二五号（二〇二一年）および註20。

表1 明治20～30年代、毛利家編輯所作成の「談話速記録」一覧(毛利家文庫76速記録)

| 76番号  | 表題(内容概略)                          | 作成年月          | 談話者(経歴)            | 質問者・速記者名                      | 防長史談会雑誌掲載号     |
|-------|-----------------------------------|---------------|--------------------|-------------------------------|----------------|
| 7(3)  | 俗論堂の勃興 兼重先生実談談                    | 明治27年4月19日    | 兼重慎一(長州藩士)         | 速記: 森定次郎                      |                |
| 14(3) | 河城隊附誌 兼重翁談話速記                     | 明治27年5月3日清書   | 同上                 |                               |                |
| 8     | 馬関義興、豊兵勃興 兼重翁史談速記録                | 明治27年5月9～11日  | 同上                 | 速記: 森定次郎                      |                |
| 7(4)  | 内乱鎮定 兼重翁談話速記                      | 明治27年7月16日成   | 同上                 | 同上                            |                |
| 7(1)  | 相州出張の顛末 兼重先生実談談                   | 明治27年7月       | 同上                 | 同上                            |                |
| 7(2)  | 馬関和議事件 兼重先生実談談                    | 明治27年7月       | 同上                 | 同上                            |                |
| 6     | 美祿部百姓一揆並諸隊暴動 兼重慎一口述               | 明治27～28年頃     | 同上                 | 同上                            |                |
| 3     | 村田清風事蹟 兼重慎一翁談話                    | 明治27～28年頃     | 同上                 | 同上                            |                |
| 4     | 眉布政之助事蹟談 兼重慎一談話口述                 | 明治27～28年頃     | 同上                 |                               |                |
| 5     | 接報事件 兼重慎一口演                       | 明治27～28年頃     | 同上                 |                               |                |
| 2     | 財政史談速記録 兼重慎一談話                    | 明治28年5月24日    | 同上                 | 速記: 西島剛太郎                     | 25～38号「長藩所収史談」 |
| 14(1) | 村岡忠治翁之叱 談話速記(文久・元治期藩内状況)          | 明治27年4月24日成   | 村岡忠治(長州藩士・所帯方・速記者) | 質問: 中原邦平／速記: 森定次郎             | 30号「経歴談」       |
| 20    | 内輪運動、御殿山焼払、隠密者殺害、久坂通武 等京師脱走、堀五郎談話 | 明治27年5月2日成    | 堀真五郎(大審院判事、貴族院議員)  | 質問: 中原邦平／速記: 森定次郎             |                |
| 14(2) | 河城隊杉山孝敬君 談話速記                     | 明治27年5月3日清書   | 杉山孝敬(砲隊隊長)         | 速記: 森定次郎                      | 31号「河城隊之創立」    |
| 14(4) | 河野隊中井愛蔵君 談話速記                     | 明治27年5月3日清書   | 中井愛蔵(砲隊隊長)         |                               |                |
| 16(2) | 馬関護夷 小野正朝君談話速記                    | 明治27年5月4日成    | 小野正朝               | 速記: 森定次郎                      | 24号「馬関護夷戦の実況談」 |
| 16(1) | 陸隊兵補給始末 天野御民君談話事記                 | 明治27年7月       | 天野御民(長州藩士)         | 同上                            |                |
| 16(3) | 志道貢一君談(京師変動)                      | 明治27年7月       | 志道貢一               | 同上                            | 24号「京都変動実態談」   |
| 17    | 中原維平大島郡政争談話 付、赤根武人捕縛一件            | 明治27年7月       | 中原維平(真武隊)          | 同上                            |                |
| 21    | 麻田公輔履歴談話速記 吉富簡一談                  | 明治28年2月14日    | 吉富簡一(豪農/初代会議長)     | 速記: 吉木竹次郎                     |                |
| 12    | 長藩内江始末談 子爵林友幸君口演                  | 明治28年6月21日    | 林友幸(子爵)            | 質問: 村田峰次郎／速記: 西島剛太郎           |                |
| 14(6) | 斉藤義輔君談話(南形入隊のこと)                  | 明治28年10月4～21日 | 斉藤義輔(南形8人隊主)       | 質問: 兼重慎一・村田峰次郎・小野為八／速記: 西島剛太郎 | 30号「小倉戦争実態談」   |
| 14(5) | 山県篤藏君談話(長州藩義勇隊および新聞社設立のこと)        | 明治29年6月2日     | 山県篤藏(長州藩義勇隊)       | 質問: 村田峰次郎／速記: 西島剛太郎           | 31号「長藩御義勇隊之事」  |

|    |                              |              |                              |                                         |
|----|------------------------------|--------------|------------------------------|-----------------------------------------|
| 19 | 筑波山義孝 斉藤佐治右衛門談史談速記           | 明治29年6月9日    | 斉藤佐治右衛門                      | 質問：作間寛三郎・中原邦平・村田隆次郎／速記：西島剛太郎            |
| 41 | 旧御小姓井上定亮翁談話                  | （明治30～31年頃）  | 井上定亮(保州藩主)                   | 質問：中原邦平／速記：伊内太郎                         |
| 35 | 村岡忠治翁談話（保土藩内政情の事）            | （明治31年1月）    | 村岡忠治(保州藩主／所部方連室方等）           | 同上                                      |
| 33 | 河北一翁談話速記 其一・二三               | （明治31年）      | 河北一(保州藩士／毛村家家族)              | 同上                                      |
| 18 | 若狭国小浜藩三浦柳斎史談速記               | 明治31年4月11日   | 三浦柳斎                         | 同上                                      |
| 32 | 小笠原武英史談速記（前主藩の顧問、財政）         | 明治32年11月11日  | 小笠原武英(清末藩士)                  | 同上<br>37号「小笠原武英氏談」                      |
| 36 | 中村祇教翁・岡義亮翁談話速記               | （明治33年10月以前） | 中村祇教(保州藩士／所部方・正戸方右衛門)        | 同上                                      |
| 47 | 岡義亮談話                        | （明治35年12月以前） | 岡義亮(保州藩士)                    | 同上                                      |
| 29 | デ・ビー・グラフ史談速記                 | （明治35年以降）    | デ・ビー・グラフ                     | 質問：中原邦平／通訳：田中鎮次郎／速記：伊内太郎<br>27号「長薩英の関係」 |
| 26 | 長井雅楽二關スル談話                   | （明治36年4月）    | 長井亮七人・脇岡又中・上山清也・小幡高政・杉民治・乃美直 | 質問：中原邦平                                 |
| 49 | 大田戦争談 里玉愛次郎談                 | （明治36年6月）    | 里玉愛次郎(保州藩士)                  | 質問：中原邦平／速記：伊内太郎                         |
| 24 | 福原又市談話速記（同藩戦争・戊辰戦争等の事）       | （明治36年8月）    | 福原又市(大相馬・千歳藩士)               | 質問：中原邦平                                 |
| 46 | 土屋平四郎君談話速記（幕政期、海軍・官職の事等）     | 明治37年7月18日   | 土屋平四郎(土屋藩家助)                 | 質問：中原邦平／速記：伊内太郎<br>28号「実薩談」             |
| 27 | 子爵穴戸磯翁談話速記（官席変動・所聞戦等）など      | （明治37年9月）    | 穴戸磯(毛村家顧問所長／子爵)              | 同上<br>25～27号「経歴談」                       |
| 34 | 原田勘兵衛翁談話（藩政後、役人職、幕末の事等）      | （明治37年秋）     | 原田勘兵衛(保州藩士)                  | 同上                                      |
| 39 | 榎政孝彦談話速記（薩長連合の事）             | 明治38年3月14日朝飯 | 榎政孝彦(原藩)                     | 同上<br>33号「薩長連合の発端」                      |
| 40 | 子爵林友幸翁談話（元内江藩、同藩戦争、島根代官の職、等） | 明治38年7月15日受取 | 林友幸(子爵)                      | 質問：中原邦平                                 |
| 31 | 小幡高政翁談話速記                    | （明治39年7月以前）  | 小幡高政(保州藩士)                   | 同上<br>23・24号「実薩談」                       |
| 43 | 筑前藩林元氏談話                     | （明治39年9月28日） | 林元氏(筑前藩士)                    | 同上                                      |
| 25 | 里玉愛二郎談話速記                    | —            | 里玉愛二郎(保州藩士)                  | 質問：中原邦平／速記：伊内太郎                         |
| 37 | 吉富簡一翁談話（同藩軍の事）               | —            | 吉富簡一                         | 同上                                      |
| 38 | 日野宗孝翁難政（藩大政、吉田氏参府の事等）        | —            | 日野宗孝(保州藩家)                   | 質問：中原邦平／速記：伊内太郎                         |
| 13 | 木梨勇男史談速記（幕末藩政更張期時の状況）        | —            | 木梨簡一(原藩)                     | 質問：荒川隆次郎／速記：伊内太郎                        |
| 22 | 男爵有地品之九郎談話速記（従軍話談の補明、戊辰戦役）   | —            | 有地品之九(原藩)                    | 同上                                      |
| 23 | 梨羽時起談話速記（戊辰戦争）               | —            | 梨羽時起(有地品之兄弟)                 | 同上                                      |

【1】「井上定亮翁談話」(毛利家文庫76速記類41)

〔表紙〕

旧小姓

井上定亮翁談話

応答者 旧御小姓 井上定亮翁  
質問者 中原邦平  
速記者 伊内太郎

問1 貴君あなたの御旧名は何と仰しやいましたか。

答1 旧名は四郎と申しました。(毛判左衛門)所が四郎様が御誕生に(明治四年七月二十七日)なりまして差支サタスケがあると云ふので、それから兵部と替へました。唯今は定亮と申します。

問2 曾て河北毛利家一翁の話を聞きましたときに、木戸公と一緒に鹿児島へ行くときに、あれが慶応二年でありましたか、一時君側を退つて居たときで、其御召出に御小姓の井上が命を伝へて来たと云ふ話でありましたが。

答2 それは私ではございませぬ。井上と云ふのが君側  
に三人居りました。井上利助と云ふのも居りました。

問3 貴君あなたは君側へ御幾歳をいくつの時に御出になりました。

答3 私の出ましたのは河北河北などと一緒にございましたが、二十三歳のときから三十四歳まででございます。

問4 サウすると文久三年からですか。

答4 左様です。亥の年でしたから文久三年からで丁度御周旋頃からです。其前に御前警衛と云ふことが創まりました、其時分に私は酉の年に江戸へ御供で行きました。サウして亥の年に西京まで御帰りになりました。其年に御小姓になりました。

問5 酉の年の御東上をのぼりの時は福川で御病氣でしたな。

答5 サウでした。あれで三十日程御滞留でした。

問6 アノ時は大騒ぎでしたナ。(この部分 原文2行割書)

答6 大騒ぎでした。其後でございましたが、五月廿八日に大島郡へ往たことがございます。追々疎暴の挙動もあり、備中倉敷へ第二奇兵隊が逃げて往たりしたことがあつたので、御書を持って大島郡からタカモリ辺まで廻りました。詰り心得違のないようにと云うことを仰聞かされる為めでした。山口へ帰つたのが六月二日です。

問7 忠正公の御平生の御食前などの御模様を一ツ御聞き申したいと思ひますが。

答7 忠正公の御趣意と云ふものは、詰り富国強兵と云ふ御趣意でございました。此の防長の大將でございます

から、其様に御節俵のことに及びますまいと云ふことも申しましたが、朝夕の召上るものなどと云ふものは一汁二菜でした。汁と肴を焼たのと香の物で、朔日・十五日・廿八日が以前の式日でございました。其時分に脇が附きます。お平が大抵附きました。それより外は何にも召上るやうなことはございませぬでした。御菓子なども夕飯後に一切位召上りましたが其外には上りませぬ。

問8 サウして御召類は木綿服でせう。

答8 御召類は御出の時は絹を御着になりましたが、御国では木綿でございました。それで五郎丸の御小袴を始終召されました。五郎丸の渋色に布で模様がある、大抵亀甲に鳳凰の模様でした。裏は加賀絹の浅黄色の絹でした。袴の御紐は白の紬でございます。

問9 平生何か御閑暇の時に御慰みと云ふやうな、御酒を召上るとか何か御慰みごとはございませぬでしたか。

答9 格別、平生御楽しみと云ふて是こそと云ふことはございませぬが、折節御薄茶を召上りました。其時分にお可笑かしこいことがございました。君側に仰せ出されて御茶道に仰付られて、御茶を飲むことを相手をさせて見いと仰せられたことがあります。所が一人も御茶を飲むことを知た者はございませぬので、皆な一向不案内でございまずと申上た所が、御笑ひなされて、それで宜い、汝等

のやうな若い者が茶をするやうなことがあつては往かぬから、却て其方が宜い、と云ふて御笑ひなされたことがある。上にはお茶を召上ることは委細御承知であるが、乃公をれともものやるのは邦憲院様・（一代元勳親父）様・清徳院様―御曾祖父様に当りますか、其御方などへ出た時分に茶を吞むことがある。其時知らぬでは済まぬから乃公は知て居るけれども、汝等われらのやうな若い者が茶を飲むことを知たりするやうなことはせエでも宜いから、と仰せられたことがございました。

問10 貴君あなたは忠正公の御病氣のときに御側に在らしたさうですナ。其節に、今少し命があつたら朝廷の爲めに尽くして見たいことがあるが、と云ふやうなことを仰せられたと云ふ御話を蔭ながら聞て居りましたが。

答10 其事は廿七日の夜中から廿八日の御薨去でございましたが、丁度廿七日の夜の丑時頃うしでございました。丑時頃からズツと御逆上をのぼせになりました。其時はモウ御息があるまでのことで、遂に御引取がモウ雀の鳴く頃でございました。唯今の御話のことは二十七日の夕飯後マのことでございまして、其時に私は御枕元に居りました所で、乃美隆庵がドウも御模様が悪いと云ふので御薬を差上しました。サウすると、乃公をれは逆も往けぬぜヨ、天余命を乃公に十年俵せば朝廷の爲に尽す所があるが残念だ、と仰

せられて、それから四ツ時分までは御話と云ふ程のことはございませぬでした。

問 11 其御一言が御最後の御言葉でしたな。

答 11 左様です。それから聊か御間違ひのことはございませぬで御昏睡と云ふ形でした。

問 12 矢張り脳充血の方でしたか。

答 12 脳充血の軽く来たものですナ。

問 13 彼の時分、朝廷へ御召しになつて居りましたナ。

答 13 朝廷へ御召しになつて居りまして、四月の上旬に御発駕と云ふことになつて居りました。

問 14 木戸公が忠正公へ藩籍奉還のことを申上たとき  
のことは御聞及はございませぬか。

答 14 それは承りませぬでしたが。一体忠正公の御趣意で、支那の宦官の弊害と云ふものは酷いものぜヨ、と予て私共へ御話がありりました。宦官の弊の如きは常に避けなければならぬと云ふ御腹があつたやうに思ひます。それで君側などの者には御政事のことなどは決して御話  
はございませぬでした。一昨年の報知新聞かに徳川の御小姓と云ふのが出て居りましたが、あれが跋扈して破れたと云ふことでした。成程忠正公の仰せられた宦官の弊と云ふものはア、云ふものであらうと、私は思ひ當つたことがございました。

問 15 何か密事を申上るときは御人払でしたか。

答 15 ハイ、人払でした。

問 16 有職の方は余程御巧者だつたサウですな。

答 16 左様でした。それですから御召物などは小袖で、御袖は三角に切たもので、茲に頂戴した御小袖もござい  
ます。

問 17 夏分は御羽織を召さなかつたと云ふことですナ。

答 17 夏は御羽織は召しませぬし、召しても晒布（あびし）の御羽織でした。

問 18 私が曾て聞きましたに、誰か御目見に出て御目見エが済だあとで忠正公が、彼は僭越（けんえつ）な衣服を着て居ると一言仰せられて、之は相済まぬ、差控か何か申付なければならぬと伺つた所が、彼は知らずに京都か何所かで買ったものであらうと仰せられた。聞て見ると其通り京都の公家衆か何か着る物を買て来たと云ふやうなことがござ  
いました。

答 18 あれは三の宮の太夫か何かでした。其時分は御維新の御復位になつてから初めて御式がありまし（ついで）ときで、毎年それまで正月の御式で随分盛大なことでしたが、其時太夫が御目見をする三の宮の太夫が何か分らぬ垂衣を着て出た所が、外の者には気が付かぬが、今何所々々の太夫が斯う云ふものを着て出たが如斯（こんな）は何ぜヨ、四位以

上の者でなければ着られぬ、彼が着たのはどう云ふ訳か、と仰せられた。サウして、彼は京都で古着ふるぎか何か買ったものであらうと斯う仰せられた。それから御目付ごめづが招寄ようきで間た所が、之は京都で古着を買いましたと言いた、忠正公の仰せられた通り、それが御目に止ると云ふのは恐入ると云ふので伺つた所が別に御咎ごとがもなかつたが、彼等は知らぬのだから能く注意して言ふて聞かすが宜いぜよ、と仰せられたことがございました。其太夫の名は林育太が知て居ります。

**問 19** 忠正公の御言行に付て何か御記憶のことはございませぬか。別に変つたことでなくとも人物を拝察うかがふに足るだけのことは……。

**答 19** 私が明治四年辛未の三月十七日に休息に家へ帰りまして、サウして二十日に私が出ました所が、其時の同役は河内庸平でございました。彼が私が出ますと休息で帰ることになつて居りますから、河内は此方へ帰つて来まして、私は直ぐ御殿に出て居りました所が、暁方に乃美隆庵が私を起こしましてドウも御上が御機嫌合だ、何分早く御医者呼びにやつたり何かしなければならぬと云ふから呼びに行きまして、夜が明けてからは裏の方へ廻りました所がズツと御心が折合になつて、強て御格別ごかくべつはない少し御眩暈めまいの模様であつたと云ふので、其時分

は腦充血脳充血など云ふことは申しませぬでした。朝伺ひました所が御寝になつて御居でございました。それから私は表の方へ帰つて来て、彼は夕飯後でございました。私には裏へ廻れと云ふことを老女が御鈴口に出て申しました。それから直ぐに私は廻りました所が、御坐の間へ来いと仰せられました。御病間へ出て御上の間が八畳の御坐敷でございました。其御居間へ出た所が其時の御話に、暁方には散々だつたが今は思ひの外快ようなつた、乃公をは今は格別はない、と云ふやうなことで何か私も話をしました所が、其以前に私が家に帰つて居る間に吉田右一と云ふ者が瓢箪ひょうたんを持て出ました。瓢箪の一合五勺位這入ります立派ちよくモテな達磨の瓢箪で、其瓢箪が御氣に入りました、全然御酒は召上りませぬでしたが、此位の(開の)盃(猪口)一つ位は召上りました、御切をせつないやうで御顔に出るやうなことでございましたが、其時に、四郎今日は手前の留守中に吉田右一が良い瓢箪を持て来をつたが、あれを持て来て見せ、持て来るばかりでも往くまアから内へ御酒を入れて持て来て四郎に此所で飲ませエと仰せられました所が、清岳院と云ふ御裏の老女が居りまして、東京者でしたが、それが瓢箪を取りに往て、蒲鉾を一枚皿へ入れて持て来て、それで御寝になつて御居でになる御坐敷端まきばに私は居つて、私が予て酒を飲むことを御承知で



すから、其酒を皆な飲めと仰せられました所が、一体酒を飲でも何ぜヨ腹へ飲めば宜いが、酒に飲まるゝやうなことがあつてはならぬから、能く腹へ飲めヨと御笑ひなされた。此瓢箪は却々珍しい瓢箪でありましたが、サウ云ふこともございました。

問20 一体私共が承はるに、人に御飲ませなさることが御好きだつたさうですナ。

答20 人に飲ませなさることは御嗜好でした。マア御眩暈が始終御持病のやうでしたナ。それから二十一日・二十二日に復た振廻りまして、大分御快氣方になつて、二十三日にはズツと快いと仰せられました。斯う云ふ工合で、其時分二十五日には一の坂の道が開きかけてございましたが、大方落成したと云ふ所でありましたから、二十五日には其道を見に行ふ、用が済むと直ぐに行くから其の事を供頭の方へ言ふて置け、と仰せられました。其時分に私共は余り御供はしませぬ方で、御小納戸の方を主任として居りましたから、所が汝も行けと仰せられました。私も御供致す積りで帰りました。それが二十三日の事でございました。明後日は斯うく云ふ仰出されであるからと添肩衣に其事を通じて置きました。添肩衣も昼から直ぐにと云ふことにして、御駕籠の者にも吻付けて置きます。二十三日も格別はない、二十四日の日に

―二十一、二、三日は御裏の女中などは昼夜共に心配をして居りましたが、二十四日の夕飯の頂戴を致しまして御裏の方へ廻りました。其時分にツイ御肴三種に御吸物位の御夕飯物でございましたが、彼是れ黄昏でございましたらう。私にも御裏へ廻れと云ふことで、御上は何も召上らぬけれども此所で御酒を頂戴きなされと云ふので、御次ぎの間に御酒を頂戴いて居りました所が、暫くして五つ(夜八時)時分位でしたか、老女が駆けて来まして、ドウも御上の御模様が變つたやうなと云ふことで、御医者も直ぐ出ました所が、強て御格別はないやうながドウも御腦を酷う衝たやうなと云ふことで、それから二十五日の朝になりまして御格別はない、私も始終出て御裏の方へ廻つて何うに、強て御格別はないやうであるがドウも御顔色が少し赤いやうでございました。それから朝の五ツ半(九時)頃でございましたか、御腦を冷すが宜いと云ふので人橋を架けて(人から人へ渡す)水も運んで、私共の同僚が六人居りましたが、担桶でセツセと御腦を冷しました所が、ズツとそれで折合があつて其の日の夜も格別はございません、六日の朝少しドウも御氣合が少し悪いと云ふことでありましたが、強てそれとても御襦袢へ御坐りなされて御居でになる。成程何う所がまだ少し御顔色が赤ございました。腦へ御つきなされたと云ふや

うな工合で、それも強て格別とは思ひませぬでしたが、六日(六)の午後の、今日で言ふと四時頃からどうも悪い方で御模様が大幅変りました。其時分に鳥田圭造(御医鳥田圭三・同竹田庸伯)・武田庸伯あたりが御脈を診て、之は不可いけぜヨ、と斯う云ふ事を申しました。私共が何う所では格別ないやうに見えましたが、それから幕方になつてドウも御悪いと云ふので横に御成りなされた。其の時分に、天余命を十年仮さば朝廷に対し大に尽す所があるが迎も痊くはならぬ、と仰せられました。それが六日の幕方でございまして、それまでも御間違と云ふやうなことは少しもございせんでした。

問 21 実に残念でしたナア。

答 21 五十三歳でございましたからねエー。それから、忠正公の御趣意と云ふものは、関ヶ原の怨恨を報ずると云ふやうな御趣意は全くございませぬ。唯だ勤王と云ふことは、元就様の御意を嗣でどこまでも朝廷を尊び、幕府を援けて行くと云ふ御趣意であつたと思ひます。最初から関ヶ原の怨があつたからと云ふ御念は決してなかつたやうに考へます。天朝へ御忠節と云ふことは元就公の御遺志で、どこまでも嗣ぐと云ふ御精神であつたに相違ないと私共は思ひます。

問 22 左様でございませう。吉川公は極く謹直な御方でありましたが、宍戸が広島に出て居るときに拘留になつ

て、それから書類などを始末して帰りに吉川公へ御目通りをして申上た所が、大膳様の御名代に縄を掛けたかと仰有つて、始めて幕府と信義を絶つと云ふことになつたさうで、それまでは幕府にはドコまでも信義を尽さなければならぬと仰有つたさうですから、忠正公も朝廷へ忠節、幕府へ信義と云ふことは御持切りになつたのですナ。

答 22 左様です。それで先程も申します通り、宦官の害は誠に恐るべきものである、ア、云ふ覆轍を踏ではならぬと云ふ思召があつたので、君側の者には御政事向のことは御話がございませぬけれども、朝廷へ御忠節、幕府へ信義と云ふことは元就公の御遺志を御嗣ぎなされて御居であつたものと思ひます。それで其中には幕府が無礼をするとか何とか云ふやうなことに付きましては、随分御憤りになつたこともございませうけれども、それ等の事は口へ出して斯うくすると云ふやうなことは決して仰せられたことはございませぬ。どこまでも洞春公の御遺志を嗣で、朝廷へ御忠節を尽し、幕府を援けて行くと云ふことで、関ヶ原のことなどは誰にも御話になつたことはございませぬ。私等も少しも承つたことはございませぬ。所が其の中に高杉晋作など、云ふ人が、今は好い機会であるから此際にどうとかなされエとか、関ヶ原の恨を御報じなされエとか御前で言ふたと云ふこと

でございますが、忠正公の御趣意は決してないように思ひます。

それから平素赤木の短刀を能く御差しになりましたが、アレハ主上へ御献上になつたと思ひます。古風な朱檀木で赤木の磨きでございます。金具は銀造りで総て磨きでございます。無反の真直な小刀でございます。平の兼行かの刀で鎌倉時代の赤木の短刀と云ふのを磨いて艶を出したものです。朱檀を彫り抜いて入れ子にしてあります。中身は平の兼行やらでした。下緒通しの所に五十位の銀の輪が這入つて居りまして、縁頭、鯉口、皆な銀で鋳で止めてあります。それが明治元年の御上京の時に朝廷へ御出なされた時に、主上がそれを見せエとか仰せられて御覧に入れて、其時分に直ぐに献上したと仰せられたことがございますが、御小刀では全梨地の貞宗もありましたが、御太刀は正宗でした。之は能く忠愛公が御差しになつたものでした。

問 23 御裏へ御這入りなされますのは、何時からと云ふ御極りがございましたか。

答 23 それは御用の御都合次第でしたが、二時より前と云ふことはございませぬでした。大抵七ツ半（五時）から六時位でした。

問 24 朝は御早ふございましたか。

明治期毛利家編輯所における「談話速記録」の作成

（山崎）

答 24 此頃で言へば七時位には御帰りでございました。

それから直ぐ御湯殿へ御出でました。腰湯と申して御半風呂でした。御裏から御帰りになると直ぐ御湯殿へ御出でございました。

問 25 御湯殿は御裏にはございませぬか。

答 25 御裏にはございませぬ。私は御櫛役も添肩衣も御配膳も致しましたが、御櫛は能くあげました。併し何でございます、実に御難儀なことでございます。併し何でございませぬ、吾々が結ふのは、私共なら頭へ付けては居られませぬが、随分下手なものですからナ、堅く御髪をあげるのが御嗜好で、鬢を引たりすると大変御機嫌が悪うございました。根を堅けて又一本元結を掛けると、後ろをポン／＼と叩いて見て堅いと是で宜いと云ふやうなことでした。蟬髻を出すと云ふやうなことは大嫌ひでございました。

問 26 御髪を結げるときは随分御困りでしたらう。

答 26 御髪を結げるときは未だ宜しうございしましたが、御剃刀をあげるのが一番困難でした。

問 27 常に召上がるもので御好き嫌ひがございましたか。

答 27 別段に是と云ふものはございませぬでしたが、漬物は召上りませぬでした。香の物は不消化だと云ふこと

でした。それですから沢庵などは召上らぬで、菜を湯煮<sup>ゆ</sup>たものへ醬油<sup>しょうゆ</sup>を掛けて召上りました。さうせぬと塩漬物を食ふと消化が悪いからと云ふことでございました。

問 28 御摂生は随分宜かつたのですか。

答 28 宜かつたのです。朔日、十五日、二十八日には御夕飯後の物が出ましたが、御刺身とか菜の吸物のやうなものが出ました。それから晦日には蕎麦が御脇きに附きました。朔日、十五日には別に御平<sup>をひら</sup>が附きました。けれどもそれ等は皆な少々づゝより召上りませぬ。御飯は小さいもので三膳は是非<sup>せひ</sup>軽く召上りました。茶碗は極く小さいので、三膳と極めて召上りました。少々は加減の悪いときでも三膳は是非<sup>あが</sup>上りました。と申すのは、其時分三膳なら三膳と極めて召上るので、若し三膳は御替<sup>かわ</sup>りがないと工合が悪いで召上らぬと云ふて皆な氣遣<sup>きづか</sup>うと云ふので、實際御工合が少々悪くて召上れぬときは半分召上らぬ中に御盛替をしました。それ等の辺には余程御注意になつたものです。

問 29 召上る物は余程嚴重でしたらうな。

答 29 一体以前は余程嚴重なものだつたと見えます。それがズツと御改革になりましたが、御試みを鬼喰<sup>おにく</sup>とか云ふて、最初に御配膳<sup>おきだん</sup>が御膳所で御試みて、それから御廊下で御廊下番が御試食で、それから御次ぎへ持て来て、

其所で御目付が立会で御試食<sup>をこゝろみ</sup>と云ふことになつて居つたそうです。三度も蓋<sup>ふた</sup>を取て、塵埃<sup>ほこり</sup>が這入つて居りはせぬかと検査<sup>み</sup>ので、度々蓋<sup>ふた</sup>を取るから温いものでは召上ることとは出来ぬ、何時<sup>いづ</sup>も冷たい物より召上らぬと云ふやうなことでした。それが忠愛公の時分にはモウなかつたのです。何方<sup>どなた</sup>でしたか、或時、湯豆腐は鍋から食ふたら宜からうと仰有つたさうです。それから忠正公も常に御用の御隙<sup>す</sup>きのときは、今なら三時頃から何です、山口の市中でも御歩行きなさる其の時分は、御馬のこともあれば御歩行のこともありました。大抵御歩行きでございまして。すると百姓などか頬被<sup>ほのかむ</sup>りをして田畑をども耕作<sup>たがや</sup>して居ります。それを横目が制止したりする。サウすると、それは止めエ、彼等が折角働いて耕作して居るのに、己<sup>を</sup>が通る故に彼等の頬被<sup>ほのかむ</sup>りをして居るのを制したりするのは、却て乃公<sup>を</sup>が歩行くのが害になるやうになるから其様な制止は止め<sup>を</sup>にせエ、と云ふことを仰せ出されたことがございました。

問 30 それ等は最も美事でございますナ。それで平生御主君はドンな事を御好みでございましたか。

答 30 別段に是れと取立てゝ申すやうなことはございませぬが、御茶は度々ありました。私共が出ました時分は京都御周旋頃で、戦争が出来ると云ふやうなことで

御帰りになりまして、それから三十日も経て御改革を仰出されて丸で皆な御引かせなされました。其時分私共も退て更に又仰せ付けられましたが、あとに残つたのは役付ばかりで、御側と云ふものは一人も無くなつたのです。

**問 31** 山口に御出でになつてからは余程閑雅なものでしたらうナ。

**答 31** 山口の御茶屋の御住居で随分不自由千萬なことであつたのです。之は別な御話ですが、<sup>(ママ)</sup>の御紋ですが、彼れが出所が分からぬと仰せられたことがございました。或は豊臣氏から貰つたものやらと仰せられました。供には葵の池の中に元就公が潜れて御居になつて、それから沢瀉を御着けになつたと云ふやうな俗説でありましたが、忠正公も余程御調べになつたやうでした。以前は紋は丸いのが当前だと云ふので、洞春公の時分にも丸の内に三星でございます。厳島、御陣ヶ原などの時の幟が出たことがありますが、矢張り皆な丸の内に三星です。

**問 32** 一に三星は何時頃からでせうか。

**答 32** それは古いでせう。親王が一品親王で一品と云ふ字を紋にしたと云ふことでした。

**問 33** 竹中織江の話に、御怒りになつたのを初めて山口で見たと云ふ話がありました。御酒下されがあつて、其

の時はア、云ふ攘夷時代で乱暴になつた時ですから、酒を飲で居る所と御居間とが余り隔たつて居らぬだつたと見えて、ヨイトコシヨいか何か大声で謡つた所が、あれは止めエと仰有つた所が、どう云ふ拍子であつたか伝へたけれども又遣り出した所が、非常に御怒りになつたと云ふことがあつたさうですが。

**答 33** それは山口の御茶屋の御住居の時に、萩から三十日やりに老翁等が出て来た其の時分に御酒頂戴があつて、其の時に俗歌をやつたのです。御殿の左に長屋がございまして其所にも老人の詰所がございましたが、御手廻り頭の益田源兵衛も行て居つて、酷う大叱責が出て、番頭を召で来いと仰せられたことがありました。其時は私は当番ではございませぬでしたが、翌日に出て聞いたことがあります。

**問 34** 到頭御咎はなくて済だと云ふことですナ

**答 34** 別に御咎めはなくて済なのです。何でも俗歌と思ひました。御茶屋は狭い場所ですからナ。其の頃御前様は此方に御居でなさる老女なども皆な此方で、私共も昼夜御次ぎに居りましたが、何しろ一年の間は実に御不自由でございました。

**問 35** 御道中の御模様はドウでございましたか。召上り物などは、道中などで拵へたものは無論召上りますまい

が。

**答 35** 昼は御弁当でございました。御茶瓶で、あとにたりましては道中と云っても大抵御船でございましたから、其時分は船の料理を召上りました。船で初めて御上京の時分は英吉利の船を御借りになりました、それで御上京になりました。それが明治元年でございました。其の時分も船からの賄を召上りました。

**問 36** 文久三年に京都から御帰りの時は御供でしたか。

**答 36** 御供でございました。岩国へ御立寄の時でした。

**問 37** 岩国へ御寄りのときは随分岩国で大事でございましたらう。

**答 37** 彼の時分は神戸でございましたが。

**問 38** 河北一氏とは何所で御一緒でしたか。

**答 38** 西京で一緒に居て向ふ番でございました。

**問 39** 河北とは御歳が違ひませう。

**答 39** 三ツ四ツ違います。彼もまだ六十四歳位のものでございませう。

**問 40** 添肩衣は御駕輿かごを離れずに居るものですか。

**答 40** 添肩衣は御駕輿に付て居て御話をしなければならぬので、マア御供の差配をするものでした。

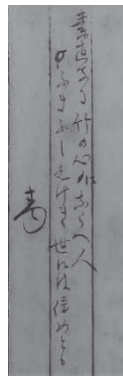
**問 41** 添肩衣と云ふのは一体どう云う所から起たものでせうか。

**答 41** 番頭が上下ですから、それに添と云ふのでせう。  
**問 42** 忠正公は大隊操練などの時に号令を御掛けのことはございませぬか。若殿様きりでしたか。

**答 42** それは爾うでございました。茲に忠正公の御歌がございます。

素直なる竹の心にならへ人

ふきふししけき世には住めとも



杉氏が書て頂戴きましたので

窮理果断者兵家之要

と云うのがございます。

それからアノ蘆山堂（蘆）が建ちました時分に、私共も心配いたしましたしたが、一体忠正公の常の御趣意と云ふものは、坐敷と云ふものは余り見晴しの宜いやうに建てゝは不可（か）ン、坐敷が宜いと遊山をしたときに気が晴れぬ、それで坐敷を建てるには少しは陰窟の方が宜いぜよと仰せられました。それから私は明倫館の普請奉行をしまして、二十三歳から（三十四）まで務めました。其の頃は御国の俗論の沸騰の時分で困りました。私が一番年齢が下で皆な



三ツ四ツ上でございましたが、皆な替へられる所で彼は

替えんでも宜い、一番年が若いから残せと云ふことで、浅野往来が御直目付で、其時分は私は家に籠うで出ませぬでしたが、是れ出エと云ふことを御直目付から言ふて来たのです。私が寝て居る所へ来た。其の時分に出た所が、人多ければ天に勝つぜよと仰せられたことがありました。それから杉孫七郎などが生雲の方へ行きましたときに、彼等が其のやうな事をやつてはならぬから、行て招で来いと仰せられて、直ぐに私が連戻りに行きました。彼の時杉等と一緒にいた者は百四五十人にもなりましたらうかい。其の時分に難義な事はドウも仕様がな、細川左馬之助などが船を廻して沖で打つと云ふことで、それに杉などが私等を欺いて出た、福原実は船の方へ行て其様な事をせずに行けるから、爾んな事は止めて呉れと云ふて私は杉等の方へ行て一緒に連れて戻つた。其の三日目に直ぐに恢復になりました。

**問 43** 彼の時は殿様を何所かへ連れ出して、御城の何所からか連れ出さうと云ふ評議があつたと云ふことですナ。

**答 43** 俗論の方では爾んなことは致しませぬ。城に這入つて正門を閉めたものですから、内に這入て居る正義派の人の協議に爾う云ふことがあつたと云ふことを聞たこ

とがありました。

**問 44** 脱隊の時も余程御心配なすつたさうですナ。

**答 44** 御心配でございました。彼の時は山口の山田が本陣でしたが、何しろ植木正一などが宜い方で、大將株が居りませぬものですから。雑兵ばかりで。

**問 45** 烏合の衆ですナ。前の俗論の時は親類喧嘩、親子喧嘩で酷うございましたらうナ。

**答 45** 左様でした。実に其の時分に忠正公の御困りのは何分人数が多いものですから。

**問 46** 其の時、乃美は御直目付で居つたので忠正公の御心配話をしましたが、諸隊に御直書を下すつた其の文に、汝等忠義の輩と雖も云々とあつて、それを明倫館の者が怒つて忠義と御書付なさるのはどうかと云ふて怒つた。それを乃美が弁解して、固より忠義の心で居るけれども今は疎暴をするから元の忠義に返れと云ふのだと云ふ事で、それなら宜いと云ふことであつたすうです。それから諸隊追討と云ふ文字があつた。是では穩かならぬと思つて棕梨からか伺つた所が、其の時御裏へ行て居らして、老女が其の事を申上たら、御館口へ御出になつて、矢立はないかと仰有つた。矢立を差上たか硯を差上たかすると、追討と云ふ字を御消しになつて鎮撫と御直しになつたと云ふことでございます。それから忠正が或時、



兎と亀の子が競走かけこをした。そうすると兎が昼寝ひるねをして居る間に亀の子が先へ越したと云ふ話があるが、浮かくと昼寝して居ると薩州の亀の子にやられるぜヨと仰つたと云ふことです。

答 46 爾う云ふ事がございましたかナ。

問 47 それから御呼出しになつてからは始終御附きでございましたか、恢復まで。

答 47 恢復まで御附き申しました。三十日程籠人かこで居つて、其時分は御直目付が乃美でございました。乃美が其の事を言ふて来たから私が出ると、人多ければ天に勝つと仰つたのです。

問 48 御側そばに御在をになつたら御苦心の趣きが伺はれましたらう。

答 48 それは御苦心でした。杉などが行きました時分は、私を何気なしに御招びなされて是非戻れと言へと仰せられた。直きに私に仰せ付けられました。

問 49 萩の沖で撃たのは空砲でございませうな。

答 49 空砲でございました。

問 50 若殿様の御小姓はなさいませぬか。

答 50 若殿様の方は致しませぬ。それから小倉を討上げました時分に、(マ、豊前国京都市) 都郡と企救郡を此方へ渡さうと云ふこととございまして、其の時分に受取に楯取と私が行き

ました。彼の時分は随分小倉も窮したもので、実に哀れ千万なこととございました。彼方あちには狸坂に守りが置てありまして、諸方からの守護も出て居りました。(豊前国京都市) 行事の館屋へ上つて裏の方から行きました。田川郡(豊前国)の稗田と云ふ所に小笠原が居られまして、間道まみちを廻つて小笠原の居られる所へ往きました。寒い時でございまして二月か三月でございました。先きに高杉と前原が行て居つて、差支ないかと云ふたら差支ないと云ふので、行事から行きました。狸坂に守護が諸方から出て居りまして。

問 51 始末の付くまでは此方へ預けて置けと云ふので、其の御受取のみでございましたか。

答 51 左様でした。

問 52 其の時は向ふの人は出ましたか。

答 52 慥か三浦治右衛門に小笠原丹下とか云ふ家老に逢ひました。小笠原近江守と云ふ御末家です、其の人ができました。私の家に頂戴した大照院様の御上下がございます。御目に懸けませう。忠正公の御召物で御小袖もございます。



御紋服の裏は絹で、御下着も絹でございます。御襦袢は白のモンパのやうなもので、御袖が御黄縮緬、昔は白縮緬でございます。世子公が津和野へ御面会に御出でになつたことがあります。元治子の年でした。其の頃私と井上小文吾が番頭で参りましたが、それ等は幕府へ内訟でございました。<sup>(ママ)</sup>津和野藩主龜井茲監

問 53 それはどう云う御用でしたか。

答 53 種々の事に付て俱にやらうと云ふこともありましたが、どうも此方の思ふやうに致しませぬものです。すから、爾んな御話でございましたらう。

問 54 貴兄は土州侯へ御出でになつたことがございますか。

答 54 左様でした。私が正使で今の野村<sup>(野村講通信大臣)</sup>大臣が副使で行

きました。彼の時後藤象二郎などが出て来て、世上の事が分からぬから近状を聞かして呉れと云ふやうな話をして居る中に、老女の村岡も出て参りました。人にも逢はせず、御寺へ押込めて置たのを取返したと云ふやうなことでした。

問 55 (1) 兼重翁の話では、後に喜久姫様を大層擯斥し

て居ると云ふことであるから取返すと云ふやうになつたが、最初忠正公が彼所へ嫁に御遣りになるときは、十分

に支度をして呉れと云ふことであつたさうですな。

問 55 (2) 忠正公と左近様と、一寸傍から考へると御家騒動でも起つたやうに思ひますが、左様なことはなかつたのですな。

答 55 サウ云ふことは少しもございませぬ。御世<sup>ごよ</sup>嗣は義理々々で行て居りますから、御家騒動はございませぬのです。左近様は御酒が御嗜好でして、近江の松と云ふ<sup>すまふ</sup>角觥の娘を御妾になすつて御在でした。それから御話が違ひますが、遠近付からなければ御付きは出ませぬことに極りました。八組からは御付きは出なかつたものです。

問 56 高杉はどう云ふ容子でした。

答 56 子供の時から身丈<sup>せだち</sup>の高い男で、ヒヨロ／＼と高い男でございました。

問 57 悪戯<sup>いたづら</sup>坊<sup>ぼう</sup>でしたらうナ。

答 57 随分悪戯<sup>いたづら</sup>者<sup>もの</sup>でした。併し何か言ふと天下の事はと能く言ひ居りました。

終

【2】「岡義右衛門翁談話」（毛利家文庫 76 速記録 47）

〔表紙〕

岡義右衛門翁談話

応答者 岡 義亮翁  
質問者 中原邦平  
速記者 伊内太郎

問1 先日中村香八翁の話で、御登城の際、御三家などに御逢ひになった時とか、老中に御逢ひになった時には種々礼が違つて居るやうですが。

答1 御三家は下坐、老中は打上げ、相對は簾上げ、之は両方から折合しました。私は御左と云ふのをやりましたが、向ふを見て居つて、何の守の誰れと云ふことを知らなければならぬ。誰某が御通行と云ふことで申上る。二重橋がございませう。あれから内は道具なしです。さうすると端の者が紋を見て何方と云ふことを知るので。平生武鑑などを能く調べて居らなければならぬのです。私共は君側は極く忌やでしたが、已むを得ず三年程遣りましたらう。

問2 添肩衣が万事心得なければならぬでせうな。

答2 爾うです。万事添肩衣と言ひ合さなければなりません。重もに端は御左でした。左の出頭は御小姓の中位です。其のズツ上が添肩衣、番頭、御配膳、御納戸、御判紙と云ふことになつて居りました。

問3 御判紙と云ふのもなさいましたか。

答3 私は添肩衣をやつて、それからそれを罷めて、御判紙と云ふ方になりました。元就公の仰せ付けで、御判だけは押切で宜いと云ふことでしたが、当時は御判は印判でございましたから、それをズツと捺して、奉書の紙に箆り込む、それを真書か何かで描取ります。さうすると奇麗になります。

問4 貴君の御直目付をなさいましたのは何年頃ですか。

答4 麻田（麻田公輔）が死なれたのが甲子の九月でしたか、彼の時は未だ君側に居りましたと思ひます。御内使に行た頃ですから、十一月頃でございましたかと思ひますが。

問5 乃美半兵衛、竹中兼和より前ですか。

答5 あれより前です。彼の辺に這入ると大変です。私等が退て、杉が退て、それから竹中兼和などでした。

問6 竹中は一寸容子が悪くなつて退引んだのですな。彼の頃に御両殿様が萩に御帰りと云ふことになりましたナ。

答6 あれより前に辞表を出して役に就て居りませぬ。

問7 彼の時、俗論党の人が運動に出て、山口の円龍寺かへ世子公が説諭に御在でになりましたナ。あの時は政府のvari目で、俗論党の有志等が山口に出て、円龍寺かへ屯集して頻りに運動したのですナ。

答7 爾うでした。あの時に井上を斬たのは屹と攘夷家であらうと云ふのですが、俗論家に爾んな勢はないと云ふことで探偵したのですが、遂に俗論党でした。井上を活かして置くところのような謀反をするとかかぬ。活かしては置かれぬと云ふ論だったと見えます。

問8 井上伯を斬た時に俗論党で重立た人はどう云ふ人でしたか。

答8 何でも棕梨の悴が居りましたな。

問9 棕梨何と云ふ人でしたか。

答9 名前は覚えませぬが、円龍寺に説得に御出でになった時は、私共は退て居りました。何でも三ヶ月程早く退たと思つて居ります。俗論の中へ引張り込まれて、這り込むやうになつてはならぬと思つて、不忠なやうでありますが、逃げやうと云ふので退たのです。

問10 サウすると十一月頃に御辞職でしたか。

答10 十月頃でしたらう。九月に麻田が自殺しましたな。

問11 御小姓の方は忠正公の御小姓でしたか。

答11 忠正公の御小姓です。東京の番手もやりました。彼は大分長く勤めましたい。

問12 それでは攘夷時分に各藩へ段々御使が行きました、貴君も因州か何処かへ御出でましたな。

答12 あれは政府の記録にも書てありませうが、石州と浜田へ行きました。皆な手を別けて行たので、因州の方へは大和（大和國之助）か誰か行きました。さうしてあの時分は御使番と云ふのがあつて、大抵それが行きました。兼重（兼重氏）などが御使番で……。其の時に御使をして戻つたのが二十一日の晩で、戻ると京都に変動があつたと云ふことで大騒ぎになつて、私等にも三田尻へ出エと云ふことでした。前田（前田孫右衛門）は馬関の和議の方へ出て行たと思ひます。三田尻では会議と云ふので彼の時は喧しい論でした。詰り和戦の論ですが、清水清太郎（加藤）などは、どうも今日攘夷を止めては不可ん、日本は攘夷と云ふことに一体なつて居るのだから、君公が縦然外国の兵に負けて此所を脱走して御逃げなされても、助けて庇護（か）して呉れもしやうが、攘夷を止めると云ふことでは日本人が容れぬから、何所までも攘夷を止めてはならぬと云ふ。麻田翁は、どうしても和議をしなければならぬと言ふた。防長を焦土にしても構はぬと云ふが、普天之下卒土之濱皆な天子様の土地であるから、若し長州を取られるやうなことがあつては日本の

咽喉を失うやうな訳になるから、命脈を損するのである故にどうしても和議でなければならぬと云ふ。中には五大州を引受けては堪らぬから、日本の中の戦争に負けさへせにやア宜いと云ふものもあり種々でした。井上（井上馨）が其の前に西洋の凡その事を君公にも申上げ、毛利登人其の他にも説て置かれたものだから、和議でなければ不可んと云ふことも、麻田も其の話は聞て居つたでございませう。それで麻田は熱心に和議でなければ不可んと云ふことを言ひ出した。広沢（広沢真也）は到頭会議の済むまで折合はぬ、今攘夷を止めては天下に対して言訳がないと云ふので、遂に黙つて泣寝入と云ふ姿で、仕舞になつて私も爾うでござるとは言へぬから黙つたきりでした。それで攘夷の一番強い政務座で檜崎弥八などは使に遣て仕舞ふた。それから因州へもやり、芸州へもやると云ふことになりました。モウ少し戦争をしてからにしやうと云ふ者もあり、彼の時幕府に迫つたのが結局は幸になつた位です。

問 13 私が開て居るに、何でも和戦の会議のあつた時に、諸隊の長官も御呼出になつたと云ふことがあつたやうですが。

答 13 それはございませぬナ。秘密会議ですから。（山県有朋）山県も赤根（赤根武人）も出張して居つたので、前田も会議へは出なかつたと思ひます。

問 14 忠正公の平生の御殿中なり御他出の時なりに付ての、平生の御行状は大抵御承知でございませうが。

答 14 大抵は知て居りますが、格別目立つ事はなかつたので。何分臣下より広く物を知て御居でになりまして、此方から御話をせぬで、話をして聴かされる位のこととでございました。西洋の事も、詳しいと云ふものは青木周弼と云ふ蘭医で長崎を卒業した者が、大抵平生は二時か三時頃、御用がなければ終日でも居りましたが、二時か三時頃、御医者が奥に廻る。其の時に青木玄道を呼で西洋の書物を訳させて端から申上る。それを聞て御坐るから、私共は西洋の事は知らぬので、汝等（きこまつたち）に西洋の事を聞かさうと云ふて能く聴かされました。それから私共少し志もございまして、君側と云ふものは唯だ御上の御用を取次ぐ位で（面白いこともなし、京都の御周旋にて御滞留の時分に、高杉の親父が其の年に壬戌丸と云ふ蒸汽船を買った。彼船に乗込たいと思つて、乗込士官であれへ乗りました。其の前に君側で東京の御本邸へ御供をする、長崎と薩摩で大砲だの蒸汽船だの大砲・小銃・煙硝を拵えることを観る為めに、君側から私が一人、山田右衛門が政府に居つて彼れと、藤井百合吉と云ふ者が居りまして、是が大砲の巧者な者で、それと今一人、船大工の藤井正之進と云ふのと四人で最初薩摩へ行て反射炉と

云ふのを見まして、鉄砲を拵えるのを研究しました。殿様から御直判で頼むと云ふことで、それから長崎へ行って居りました。長崎には百日から居りましたが、薩摩には八十日程居りました。

**問 15** 教師は誰ですか。

**答 15** 長崎にはツバラーと云ふのが居りました。極く宜い教師ではありません。マダ銃陣の稽古の始まらぬ前でしたから、其の頃薩摩では煙硝も拵え、軍艦も造り掛けて居るのを見て見ました。大砲を鑄る方は反射鑪と云ふので、軍艦も未だ完全せぬから見せられぬと云ふたのですが、沖の方を見ると高く整然と出来て居りました。其の時分薩摩には色々な製造所が出来て居りました。それから薩州で高爐(ツマ、高爐カ)と云ふのがあつて、銅を穿て大砲を造るのがありました。反射鑪の方は鉄の方でした。

**問 16** ヘルトンの練習は其の後に始まつたものですか。

**答 16** 爾うです。ヘルトンの小隊操練は其の後でした。其の時分書物などはございませぬから、西洋の機械などの図を写し取て居つたので、それから帰つて庚申丸と云ふ蒸汽船を造りましたが、其の時分は私は復た君側に戻つて居りましたので、今の藤井と、ドツチも同じ藤井ですが、其の大工と二人で造りました。丙辰丸が初めて安政元年度の年でした。其の前に長崎に稽古があると云

ふので、京都へ言ひ立て、彼の学問をして蒸汽船へ乗りたい、航海をやつて見たいと言ふたら、高杉が遣らせて呉れましたので、京都から御暇を貰つて十月かに品川沖に居た壬戌丸に乗りました。艦長が北條源藏で、平川巴と云ふ来島又兵衛の息子と土屋弥之助と私と、何でも五人かの士官でございました。士官と云ふても火を焚くことから何から皆なやりました。其の中に梅田と云ふ人が居りましたが、長嶺一。

**問 17** 梅田幽斎の息子ではございませぬか。

**答 17** さうではございませぬ。長嶺に松本金次郎と云ふも居りました。

**問 18** 壬戌丸は何人位乗れましたか。

**答 18** あれは四十人でした。一体が商売船でした。鉄砲は小いのが二挺か三挺きりありませんでした。槌か六万円出たと思ひます。馬関で引上げてどうかしたのを三千円程で売たでございませう。香港かどこかで売りました。庚申丸も浮かして売りました。

**問 19** 彼の時に御乗込であつたものではございませぬか。

**答 19** 彼の時は君側に居りました。艦に乗て戻つて居る中に、ア、云ふ事になつたので、私は君側には二十余年余も居りました。杉と竹中、兼重、私と四人がボツト上へあが上りまして、其の時に御納戸、御配膳などで居つたのが

皆な兼持で上りました。其の拍子に又艦へ行かれぬやうになりました。それから君公は常に御紋服でしたが、筒袖になさいました。袖を三角に切て筒袖になさいました。後には羽織を召さんなのです。

問20 御召物の裏は絹ですか。

答20 絹です。下着は縞の絹でした。上着は鼠に染めたもので、羽二重の裏でした。羽織も表は木綿で、裏は絹でございます。一体公は能く御気の付た方でして、細かい事ですが、御膳部が御膳を上げると、其の中に不厭な菜があつても、それを皆な召上つた風に一寸箸で啄いて食ふたようにして御置になる。さうすると皆な御箸か付たと云ふて御膳部の者などが喜びました。御不厭な物は太抵上げぬのですが、其の中に加減などがあつて、氣に入らないものでも上つたやうにしてありましたが、それを大層皆なが喜びました。

問21 平生の御食事は。

答21 平生は朝御汁と香の物位で、昼は向ふへ肴の煮付けがあつたり、大抵汁物に一菜漬物位でした。

問22 御飯は二度焚きだつたと云ふことですが。

答22 さうです。一遍焚て、今度それを蒸すのです。湯の上へ揚げて水瀧みたやうなものがあつて蒸しました。軽くなつて極く淡泊な味になります。それを上げました。

それから肴を二品も上げると云ふことは式日の日位で、平日御夕飯後の物と云ふて、時に御差身位で、酒がでることがありました。

問23 御酒は上らぬ方せう。

答23 上らぬと云ふて宜しうございます。猪口で半分も御上りになる位のことですから。

問24 御飯の御菜類で、今日は何か斯う云ふ物が食たいとか何とか、御好みはありませぬでしたか。

答24 さう云ふことはなかつたです。今日のは旨かつたぜよと仰有られても、今度復た拵えとは仰有られぬ。爾んなことは極つたもので、膝などは御組みになつたことがない。御文庫に御凭りなさる位のことでした。日外東京から、御行状に付て何か書て出せと云ふこととでしたが、書くやうなこともなし、誠に目立たることがございませぬ。

問25 御小姓などが時々御氣に入らぬやうなことがあつて、御叱りを受けるやうなことはございませぬか。

答25 それはございませぬ。私共が別段御諫めするやうなことは勿論ございませぬが、何か言い出すと、口内で狡猾い事を言ふな、などと御構ひなさるやうなことはありましたが、（御史は今の秘密顧問のやうなものでせうが、ことあり）御話は別のやうですが、御前を願うと云ふて出て、議論を申上たりすることもあります。



一体政府と待御史と云ふものは合はぬ方が宜いので、上は御老練ですから、政府の方から何か言ふて出る時分に直ぐにそれは宜いとか悪いとか仰<sup>う</sup>やらずに、翌日まで案じて置うと云ふ、それで政府の者は退<sup>さが</sup>りませう。政府の方は各々勝手に御前へ出ることは出来ぬのです。さうして御坐の間と云ふて奥の御間でツイ袴などは着ずと御居でになり、待御史を其所へ召出される、政府の者が斯う云ふ事を遣れと云ふが如何かと云ふので一会議やるのです。其の時分には待御史は世上の事も能く知り、政府の状態も知て居つて、明瞭な人ならば、其の様に政府の方で言ふても斯う云ふ理由であるから行けまいとか、それは賛成であるとか言ふ。それから翌日になつて政府の者を召出されて御返答なさいました。

問 26 極密の御会議は待御史と誰が出ましたか。

答 26 待御史だけでした。

問 27 袴を御着けにならずにやるのは待御史だけでしたか。

答 27 当職などが平生何かの御話で出る時も御袴なしだと思ひます。外様の者が出る時は御袴着きでした。

問 28 平生御居でになる御坐の間は……。

答 28 御小坐敷と云ふのです。それで長井でも毛利登でも誰でも、後には中々智慧を殿様に付けると云ふことは

出来なくなつたのです。政府の方でも漸々巧者になるから、誰が殿様に智慧を付けた、誰がどう云ふ説を申上て斯うなつたと云ふことは推測がつくし、さう云ふ嫌疑が恐ろしく、男にも関係することだから、政府の方も待御史も余程骨の折れることになつたのです。

問 29 待御史は恐がられた訳ですナ。極密の職に居るのですから。

答 29 今でも極密顧問官が論じて多数で決したと云ふやうなことが出ますが、此方はさうでなく、内々会議でするのだが、彼等が斯う云ふからとは言はぬので、詰り君公の思召に決すると云ふ訳です。

問 30 萩の時ですが、記録所と政府とありますが、会議の時や何かは地、江戸方、御直目付と云ふやうな順になりますか。

答 30 政事に参与するのは待御史一局、政府とそれから地、江戸の政府―大抵地の手元が出るやうなことはありませぬ。江戸方の方でそれを受けて御前へ持て出るので、それから時々政府でも封印で申上ることがあります。それが御印封で下りますから、どう決したか他には分らぬこともあります。夜急ぐことなどは印封で伺ひました。

問 31 書面を以て伺う時は読上げますか。

答 31 向ふへ向けて出す位のものです。

問 32 山口へ御転居になつてからは萩のやうではない、余程楽でしたらう。周布などもチョイ／＼伺はれて。

答 32 さうです。麻田も時々出られました。彼方へ行てからは直かにドン／＼出られました。

問 33 山口で麻田が忠正公の御次ぎの間で酒を飲んだことがあるさうですナ。

答 33 それは狹隘うございましたから。一体公は人に酒を飲ませることが御好きでしたから。何やら麻田の事で御話がありましたヨ、忘れましたが。山口へ御出でにならぬ前に、公は鉄砲獵が御好きでして、鴨が下りますと御船へ君側が二人乗て居りまして、私も当番の日に水棹をしました、毎でも御小姓が水棹に付て居りました。羽織は脱ぐが袴は穿てやりました。

御城の近辺で、花の江の御茶屋辺でした。御供は添肩衣、御小姓が二人、御草履取一人、四人位でした。花の江の御茶屋へは始終御出でました。彼所へ御出でになると抹茶が御好きで、併し本統の会席でなしに、ツイ喫ることが御嗜きで、彼所へ御入来になると御茶道がチャンと先きへ廻つて居りますから、御茶道が湯を沸かして茶を煎てゝ上げます。それがホンの御楽みでした。御茶だけは心の内で楽しんで居になつたやうです。

問 34 御寢所には奥でも御小姓が不寝番をしましたか。

答 34 否エ、御錠口と云ふて内外の締りをする所があります。其所を閉めて奥に御這入りになり婦人の方へ御出でになる。さうして朝此方へ御歸りになります。御寢所には不寝はしませぬ。御上寝と云ふて御錠口に一番近い所へ行て寝るのがあります。あとは皆な御錠口外で、御坐の間辺から御次へ寝ます。

問 35 忠正公の平生の御行常には、どうも目立つやうなことはございませぬナ。

答 35 爾うです。それと御髪役と云ふのがあります。私共も務めました。随分下手な方でしたが。御堪忍が宜い方でしたから、御顔なども斬りさえしなければ毛は残るけれどもやりましたが、其の間は見台で読書をなさいました。通鑑だの史記、ア、云ふものを御読みになる。さうして居る間に結ふのですが、整然と見台の方を向て御居でなれば宜いが、下を向たり上を向たり、読書なさる中でも中々気を遣ふてやらねばならぬ。其の中に誰を呼べなどと仰有つてある。それが出ると横を向て御話などが始まるものですから余程困りました。

問 36 御髪のとときは大抵読書ですナ。

答 36 大抵読書なされました。

問 37 御髪役は随分骨が折れませうナ。

答 37 随分辛ふございます。それから御炬燵の間と云ふ

御小坐敷が奥にりましたが、火は入れてあるが、御炬燵へ御暖りになつたことがございませぬ。御奥の御女中の方へ入らしつてはどうか知りませぬが、冬は御側に銅の火鉢があつて烟草盆が出て居る位のことです。

問 38 御烟草は召上りましたか。

答 38 烟草は召上りました。掛物なども之を掛けて置けと云ふやうな差図はなされぬ。串戯に自分の好きなものを掛けて置けと仰有るやうなことはありません。書画の事も随分委しいやうでしたが、御装束の事が詳しくうございました。

問 39 將軍へ拝謁なさるときなどは何うでございました。

答 39 あれは中々喧しいことで、大広間でも疊何疊目が誰々と云ふので、一尺下つても行かぬ、坐が少しでも高かつたり低かつたりすると中々折合はぬ。それで極く参内事が御嫌ひでしたが、將軍へ拝謁なさることは御忌やでしたナ。さう云ふ、厳格なやうですが、何時登城で何時から御目見えと云ふ、其の待て居る間は各々大名方は重箱を持て出る。代り番に持て出るやうになつて居りましたらう。三十六万石相応の重箱を拵えて持て出て、將軍に拝謁の始まる時間まで、酒の嗜きな人は酒を飲むと云ふやうなことを大名方が寄てやつて居つたもので。

それから御坊主と云ふ者が居りますナ、それへ残つた酒でも何でも皆な下さると云ふことになつて居りました。尤も其の御坊主の中に平生扶持をして置くのがありますから。今の奥から御帰りの時刻ですが、奥では早いこととございましたらうが、此方へは朝の五ツでした。八時ですが、併しそれもキツチリ八時と云ふ訳には行きませぬ。

○1 私が御遺物を頂戴して居ります御坐の間の襖を張替るときに、冷泉為之が書た常盤が牛若を連れた図を張らうとしたら、彼れはひどい、外のにセエと仰有つて、別に三谷と云ふ絵師に御描かせになつた。さうして張替た。それを御遺物に頂戴しました。画が迂詐だと云ふ思召でせう。狩野で迂詐を描たのが氣に入らなかつたのでせう。

○2 御器用でなく、変つた事のないのが宜かつたのでございませう。

○3 恵日院様とは一年に一度位御茶などがあつて御逢になりました。

○4 天山を廃して西洋陣にするに、井上小豊吾と云ふ人が大層骨を折たものです。

○5 麻田が心配をして、大砲の稽古として差越さると

云ふ訳合でございましたが、江川太郎左衛門の所へ稽古に行く時分に、井上は中隊長指令官までやりました。麻田翁も這入つて居りましたが、尻が痛いと言ふて居つた。江川が葦山笠で調練をやる時に、井上や屋敷の者が出て一緒にやるやうになつたので、公は嬉しさうに御馬見所で覽て居らつしやいました。

○6 私は村田清風翁に逢ふのは恐くも何ともなかつた。人は恐いと言ひましたが。清風翁が曾て、英人は不具な體だけれども私は智者だと思ふと言ふた。

○7 杉孫七郎が女を相手にしやるので、或人が能樂嫌い、芝居もきらい、酒嫌い、好きなしろもの一つありません、と評した。

○8 栄治が朝御機嫌伺ひに出ると、公が栄治ヲさんカゝ、栄治「折々は」と云ふた。

○9 村岡忠治の話に、私が誤つたのは、彼の時に易を立てゝ見たら、長州はどうしても滅亡すると云ふ易が出た。之はどうもならぬと思ふて一生懸命に心配してやつたが、それは幕府の亡びると云ふ易であつた。どうも見やうが狭く見たので誤つた。

○10 春嶽公が、毛利は彼のやうに温順な人だから彼様な事は仕出さうとは思はなかつたと言われた。



吉富家文書 156



田中保彦収集史料 73